新編國文讀本

新制版 卷五

375.9
Je14
資料室

42546
教科書文庫
4
810
44-1933.
200030
1754

昭和六年十一月六日
中學校國語漢文科用

文部省檢定濟

昭和八年七月六日
實業學校國語科用

新編國文讀本

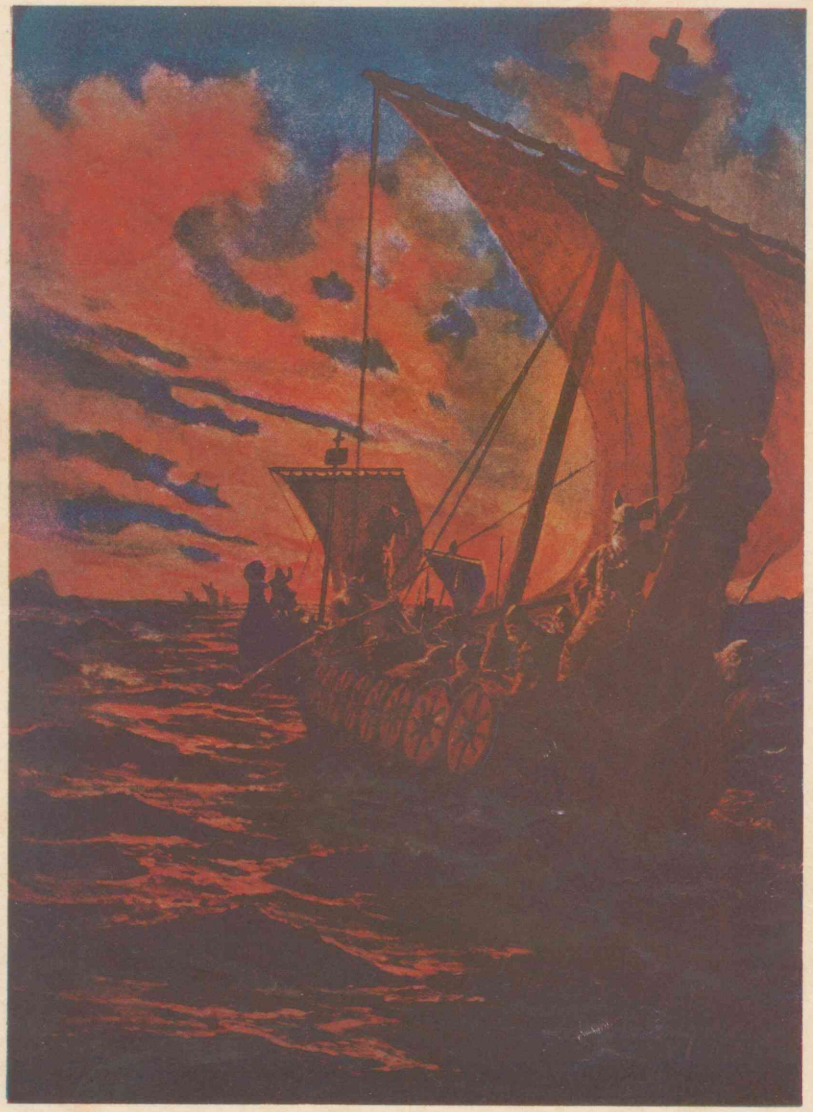
新制版

千田憲編

東京 右文書院藏版

校名	學組	姓名
神港中學校	第三學年二組	大石義見

資料室
395.9
Se14



第一七

夕陽

廣島大學圖書之印

広島大学
教
34763
図書

新編

國文讀本　新制版　卷五

目次

一　明と淨と直と……五十嵐　力……一
二　自然の好愛……芳賀矢一……七
三　小諸なる古城のほとり……島崎藤村……一二
四　武士道……山路愛山……一四
五　勿來關……熊田葦城……二一
六　春宵漫歩……夏目漱石……二三
七　蛙……長塚　節……二八
八　春の別れ……正岡子規……三五

九　源平の三烈士……室鳩巣……三七
一〇　乃木大將の殉死……德富蘇峰……四三
一一　岩倉右府……井上毅……四九
一二　學者の苦心……芳賀矢一……五九
一三　袁大總統に寄す……大隈重信……六四
一四　初夏の京城……尾崎喜八……六七
一五　森……與謝野寛……七
一六　波と船唄……木下杢太郎……七七
一七　夕陽の美……高山樗牛……七九
一八　一口噺の詩趣……幸田露伴……八二
一九　雷のすし……「醒睡笑」……八六
二〇　柑子……九〇

二一　田舍の自然……吉村冬彦……九二
二二　四時の樂しみ……貝原益軒……九五
一　花ざかり……九五
二　杜鵑……九七
三　端居の風……九九
四　月の色……一〇〇
五　埋火……一〇二
二三　仁和寺の法師……兼好法師……一〇四
一　石清水詣……一〇四
二　足鼎……一〇四
二四　曾我兄弟……一〇六
一　空ゆく雁……「曾我物語」……一〇七
二　小袖曾我……謠曲……一一四
三　陣屋問答……森鷗外……一二一

二五　名文の批評……大町桂月……一三四
二六　苔みづ……良寛……一三八
二七　蘇州城内……芥川龍之介……一四〇
二八　星の光……山本一清……一四五
二九　吉野哀史……一四八
一　櫻井の訣別……「太平記」……一四八
二　行宮の秋霧……北畠親房……一五三
三　如意輪寺……「太平記」……一五八
四　新葉集の歌……大町桂月……一六四
三〇　日本樊噲……菊池寛……一六八

廣島大學圖書之印

新編國文讀本　新制版　卷五

一　明と淨と直と

五十嵐　力

五十嵐　力
山形縣の人、國文學者、文學博士、早稲田大學教授、明治七年生。

宣命

文武天皇が御即位の際に下された宣命の中に、左の詞がある。

是を以て、百官人等、四方の食國を治めまつれと任け給へる國國の宰等に至るまでに、天皇が朝廷の敷かし給ひ、行ひ給へる國の法を、過ち犯すことなく、明き淨き直き誠の心もちて云々。

我等は此の宣命にある「明き」「淨き」「直き」心といふのが、日本人の性質中の核となり、中心となるものであらうと思ふ。此の語は代々の詔勅に幾度も幾度も繰返されてゐる、しかも重きを置いて繰返されてゐる。其の他、古事記・日本紀・萬葉集等に於て、重々しい場合

に幾度も用ゐられてゐる。これは畢竟、我等の祖先が心の中に深く感じたこと、大和民族に最も濃く最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて屢〻發したのではないか。世に大和民族の特性と稱せらるゝ現實・光明・活動・向上・中庸・快活・忠孝・清廉・勇武・義俠・風雅等の諸性質は、概ね此の明・淨・直の三大性を基本として說明されるらしく、殊には三種の神器が此の三大性の標章として遺憾なきやうに思はれる。

玲瓏透徹

齋く

鏡の性は明、其の德は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は鏡のやうな明き心を以て正しく事物を觀た。故に其の見方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黑い物は黑いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、惡行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大神は「鏡を齋きて、我が大御前を見るが如くせよ。」と仰せられた。全國無數の神社には、其の鏡が神體として齋かれてある。詔勅や、祝詞や、君臣應對の詞などに「明き心」といふ語が澤山用ゐられてゐる。これ等はいづれも、此の性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據になると思ふ。我が國民の中庸性・折衷性・調和性も一面此の根本性質の結果であらう。我が國には政治・社會・宗教等の諸方面に互つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突がないないではないが、割合に少なく、又いつもよい加減に切上げて調和するといふ傾がある。例へば、異主義が新に外國から入つて來ると毛色が變つてゐるので、暫くは爭ふが、やがてお互に道理も無理もあることが解ると、馬鹿らしくて爭論が續けられなくなる。そこで騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事此の通りである。大和民族は、十字軍や佛蘭西革命の如き、極端な狂言を演ずるには餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は日本人を「公正」といひ、「理に鋭し。」といひ、「感情の平靜を

祝詞

折衷性

騎虎の勢

胸懷洞然

汚穢

圓融の相

禊祓

保つ。」といひ、「日本人は何事をも受入るゝ胸懷洞然たる人種なり。」というた外人の評が、決してでたらめの空世辭ではないと思ふ。

清淨の德は、玉に於て絶好の標章を得てゐる。淨と明とは似てはゐるが、同じくない。其の異ふ趣は、丁度鏡と玉との異ふ趣に似てゐる。汚穢混濁を忌むことは、清・明ともに同樣であるが、清はそれ以上に味ひあり、溫かみあることを要する。例へば、鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すを要とせずして、溫潤の光、圓融の相、澄徹の趣あることを要するが如きものである。本來日本人は明らかに事物を看る長所があるのみならず、外物を看るにも、自己を發表するにも、一種の味ひある態度を具へてゐた。其の明は空白の明ではなくして、溫潤・圓融澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶・夜光珠の明である。我が國には古來禊・祓が多く行はれ、廣く用ゐられ、且重要

花を翳し
一谷の戰に於ける梶原景時の故事。

歌詠を贈答
源義家と安倍貞任の故事。

冑に香を
木村重成の故事。

視されてゐた。祝詞・宣命を始として多くの歌詠・諷謠は、明き心を現しながら、趣味風韻に富んでゐた。しかも其の趣味や形容が、諸外國、例へば、支那の文學に見る如き、張子の虎のやうな誇張の弊がなくて、よく其の實を現し、中味にふさはしい修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戰陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は冑に香を焚きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それ〴〵ふさはしい文學を有つてゐる。外國出稼ぎの勞働者が、其の日の生活に窮しながらも、猶一二の植木鉢を持たぬはなく、而してこは外國の勞働者に絶えて見ぬ所といはれてゐる。大工・指物屋の手に成るはかなき家具や、細工物も、西洋のが表面のみ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えぬ裏面まで手を盡すといふ嗜みがあるといはれる。これ等は孰れも大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではない

か。我等は「日本人は世界一の審美眼を有する國民にして、貴族より勞働者に至るまで皆美術を愛翫す。」といふた一外人の批評が、必ずしも虛妄でないと信ずる。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。其の厭ふ所は躊躇・緩慢・首鼠兩端である、曲ること、拗ること、邪なることである。叢雲の劍は其の標章として、此の上なくふさはしい。元來直の德の本領は、心の明らかに見た所に向つて直前するにある。若し右の三德を一括して、これを一體と見れば、明は其の靜的方面卽ち知の方面で、直は動的方面卽ち意の方面である。知の明らかに見たる所をば、意が直進して實現する、而して知の見方、意の働き方に潔くして言ひ知らぬ味ひのあるのが、邦人固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て、父母を見れば尊し、妻子見ればめぐしうつくし。」故にその明き心の示す所に從ひ、直前して父

審美眼

首鼠兩端

父母を見れば云々　萬葉集、山上憶良の「令レ反二惑情一歌」中の句。

母に事へ、妻子を愛しむ。君を仰げば、「八隅知し大君」、「現つ神」として、國に臨み給ふさまが限りなく高く貴い、故に直前して「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍。」の獻身的奉公を效す。此の通りである。而して其の君父に事へ、妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別・利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。此處が眞淵・宣長等國學者が感歎し自負して措かなかつた所である。

—「新國文學史」—

海行かば　萬葉集、大伴家持の「賀二陸奥國出レ金詔書一歌」の一節。「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、かへりみはせじ。」

芳賀矢一　福井縣の人、國文學者、文學博士、昭和二年歿、年六十一。

二　自然の好愛

芳賀矢一

我が日本國は、氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉四季折々の風景は誠にうつくしい。かういふ國土の住民が現生活に執着するのは當然である。四圍の風光の吾等の前に橫たはつてゐるものが、凡て笑つてゐる中に、住民がひとり笑はずにはゐ

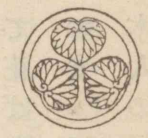
しのぶずり

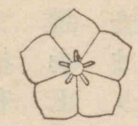
られぬ。現世を愛しこの世の生活を樂しむ國民が、天地山川を愛し、自然にあこがれるのも當然である。この點に於ては、吾々は天の福德を得てゐるといつてよろしい。殊に、日本人が花鳥風月に親しむことは吾人の生活のいづれの方面に於ても見られる。

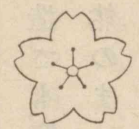
上代における衣食住は、多くは、我が國に繁茂してゐた植物界から材料を取つた。木材で家を造り、藤葛を以てくゝりつけ、楮でしろたへ、麻であらたへを作り、草木の汁でそれを染め、蔓草を取つてたすきとした。日本の女の子の着物の模樣のはでやかなことは、西洋人の著書にもいつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、それよりもなほ綺麗である。それが、やがて衣服にもうつつて來るのである。昔のしのぶずりも今の裾模樣も、つまりおなじことである。菊や櫻や梅や牡丹を大きく染めだした友禪縮緬、襦珍の帶から下駄の鼻緒のさきまで、草木の模樣で飾つてある。

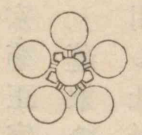
色合の名稱も、櫻色・桃色・山吹色・栗色・葡萄色など澤山ある。

中古の女裝束の櫻重ね・梅重ね・山吹重ね等も、四季折々の花に因んだのであつた。

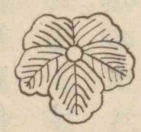

三葵葉紋


桔梗紋


櫻紋


梅鉢紋

牡丹紋


蔦紋

上り藤紋

三蓋松紋

やさしい女流のは當然ともいはうが、武士の戰爭に出立つ甲冑にも、小櫻縅・卯花縅・澤瀉縅などいふがある。いかにも優美ではないか。又、旗やさしものに蝶や笹龍膽や澤瀉をつける。皇室の御紋も菊・桐で、德川家のは葵である。今日の家々の定紋にも桔梗・櫻・梅鉢・牡丹・蔦・藤・松の類が最も多い。それから食物の方面でも、名稱に於て、萩の餅・牡丹餅を始として、菓子屋の目錄を一見すれば、一層その多いことがわかる。形も、花木に取るのが多い。

什器

菓子には別して多い。汁粉には十二ヶ月の雅名があり、酒にも櫻正宗・菊正宗がある。

蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ゐられ、魚類の料理にも植物を用ゐ、牡丹餅を贈るには重箱に南天の葉をしく。其の他、庭園の構造でも、室内の裝飾・什器でも、家屋の建築でも、すべて植物を用ゐ、自然のまゝの趣味を有してゐる。

插花の術、箱庭作り、繪畫など、皆我が國人獨得の伎倆で、特殊の發達をしてゐる。すべて、花を活けるにも、これを畫くにも、その生きたまゝ自然のまゝにするのが美しいのである。枝をむしり取つて花ばかり花瓶に插込むのは、西洋の風であるが、自然の幹枝をそのまゝに、天地の配合を宜しくあらはすのが、活花でも盆栽でも、日本人の好みである。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。

點綴

我が國の文學に、自然を吟咏したものの多いことは、いふまでもない。繪畫が花鳥を以て優つてゐることや、彫刻も人物よりは花鳥が多く、音樂も人聲よりは自然の音色に近いことなどを考へて見れば、我が國の文學が自然美を歌ふを長所とすることがわかる。誠に、上古から近世までの歌題の大半は花鳥風月である。軍記・謠曲・淨瑠璃なども敍景の文を點綴して精彩を生ずる。俳句に至つては、季の無いものは句にならぬことになつてゐるのである。

凡そ、四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことが無い。この四季の景色と人事とを結びつけて感ずることは、卽ちあはれを知ることである。源義家や源三位頼政や平忠度等の、日本武士として優にやさしく感ぜられるのは、このあはれを知るといふことがあつたからである。頼朝も尊氏も秀吉も太田道灌も、暇あるときには、風流の技を翫んだ。日本の武士道は、自然の美を愛し物

物のあはれ

のあはれを解することを一つの要素とする。

英雄豪傑ばかりではない。日本人ほど國民全體にあはれを知つてゐる、卽ち、詩人的な國民は、恐らく世界中にまたとあるまい。歌心は誰でもある。歌は作らぬまでも、俳句を作る。上手でなくとも、何人も作つて、花見遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、詩人的國民はまことに遊事に忙しいのである。

—「國民性十論」—

島崎藤村
名は春樹、長野縣の人、文學者、明治五年生。

三　小諸なる古城のほとり

島崎藤村

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ。
綠なす蘿蔞は萌えず
若草も藉くによしなし。
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る。

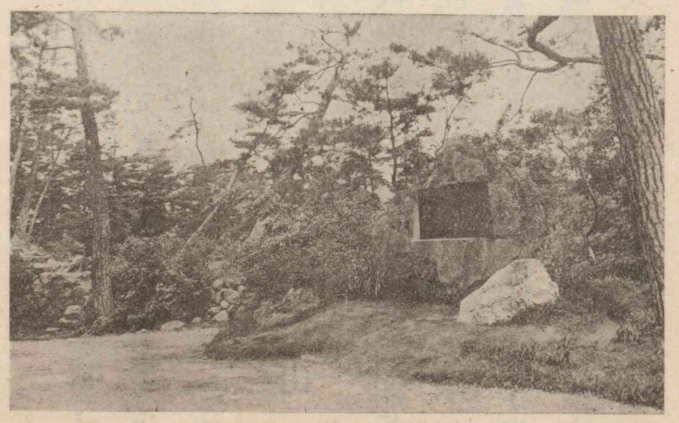
あたゝかき光はあれど
野に滿つるかをりも知らず。
淺くのみ春は霞みて
麥の色はつかに靑し。
旅人の群はいくつか
畑中の道を急ぎぬ。

暮れ行けば淺間も見えず
歌哀し佐久の草笛。

小諸
長野縣北佐久郡小諸町、牧野氏舊城下。

かをり

淺間
淺間山、群馬縣と長野縣との境にあり。



小諸なる藤村の詩碑

千曲川
長野縣の北部を流れ、末は信濃川となる。

山路愛山
名は彌吉、歴史家、評論家、大正六年歿、年五十四。

神護景雲三年
稱德天皇の御代。

天慶
朱雀天皇の時の年號。

千曲川いさよふ波の
岸近き宿にのぼりつ。
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む。

「藤村全集」

四　武士道

山路愛山

神護景雲三年、朝廷警衛のため東人を召させ給ひし時の詔に、「東人は、常に『額に箭は立つとも、背には立てじ。』といひて、君を一心に護るものぞ。」とあり。東國は蝦夷と境を接して、民族の生存競爭劇しく、戰爭なども多かりしゆゑ、自ら健氣なる風をも養成したるならん。蝦夷の叛亂聞えずなりし後も、天慶以來、幾度か干戈動き、大名・小名の私鬪も亦少からず、人氣自ら上國に異なり。かくて武士道

面目律

石橋山
相模國小田原町の西方にあり。治承四年源頼朝、大庭景親と此處に戰ひて敗れたり。

物忌

といふものもこの間に成長したり。

武士道とは如何なるものぞや。一定の釋義を下すはむづかしきことなれども、まづは武士間に行はれたる面目律とも云ふべきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は、臆病といふ事なり。頼朝は石橋山の危難の時、日頃髻の中に隱しおきたる觀音の像を取出し、「我が首、若し大庭等の手に渡らん時、髻中に此の本尊のあるを見ば、源氏の大將の所爲に似ずとて嘲らるべし。それが口惜しければ、かくは取出し奉るものなり。」と云へり。崇德上皇、爲義を白河殿に召させ給ひし時、爲義、昨夜の凶夢を陳べて、御味方たるべき仰辭退せんとしたるに、使の殿上人、「武將の身として、夢見・物忌などは餘りに後れたる沙汰なり。」といはれしかば、爲義「實にも。」とて參殿に及びたり。

宗旨も信仰も武士に取つては平時の事なり。一旦非常に臨ん

極意

いきまく

義平　源義朝の長子。平治元年歿。年二十。

では、唯何事も惑はず突進するが、武士道の極意なり。されば保元の亂に、重盛は、「勅命を蒙つて罷り向ひたるものが、敵陣強しとて引返すべきやうやある。」といきまき、平治の亂に、義朝は義平の敗軍を見て、「義平が河より西へ引きつるは、家の疵とおぼゆるぞ。今は何をか期すべき、討死せんのみ。」と云ひて敵陣に馳突したり。臆病は弓矢の疵となるべきものなれば、寧ろ死すとも卑怯の振舞すべからずとは、武士道の第一義にして、神護景雲の詔に、「額に箭は立つとも背には立てじ。」とあるものと同意なり。如何なる場合にも、逃げたりなど云はれんは口惜し。「侍程の者が一度申さじと思ひ切りしことを、たとひ拷問せられたればとて申すべきやうなし。」と云ふがごとく、何事も思ひ切つて、惡びれぬを武士の魂とす。

次に、其の頃の武士道にて宗と重んじたるは、志の專一なることなり。尤も、「大名は草の靡き。」といふ諺は其の頃よりあり。強さう

加擔

屋島の内府　内大臣平宗盛。壽永四年歿。年三十。

なる方に加擔して、所領安堵を求むるは一般の習なりしかども、さりとて輿論はかく意氣地なきを善しとせしには非ず。主從の義を重んじ、志を主家に盡すを以て眞の武士の面目とし、殊に主家の盛衰に從つて向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に從ふ武士は、「源氏に二人の主取ることなければ、宣旨なりとて、えこそ内裏へは參るまじけれ。」と云ひしものもあり。「源氏の習、心がはりやあるべき。」とて肩を怒らしゝものもあり。「凡そ武士には二心を恥とす。殊に源氏の習は左樣に候。」と力みしものもあり。平家に從ふ武士も、忠盛の家の子には、「主君若し辱しめられたらんには、えこそ遠慮はすまじけれ。必ず殿上までも斬入らん。」と決心したるものもあり。平宗清は賴朝の恩人にて、賴朝より「關東に來らば善く扶持せん。」と言送りたれども、「平家零落の後、賴朝に參向する一條、尤も恥ぢ存じ候。」と云ひ、直ちに屋島の内府に參り、運命を主

家と共にしたり。齋藤別當實盛は、「吉についてあなたへ參り、こなたへ參らんは見苦し。今は源氏の世盛りとなりたりとも、我は平家の味方となりて討死せん。」とて、黑く染めたる白髮首を木曾義仲の士に取らせたり。

かく臆病を惡み、主人に忠志の專一ならんことを宗としたる武士道が、其の結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東國武士が平家を西海に討ちし時、病身ながら天下の重事なり。坐視すべきに非ず。とても死ぬる身ならば、戰場に死なん。」とて出陣したる者のことは、吾妻鏡にも見えたり。「事あらば眞先かけて命を主君に奉らん。弓矢執る身は、死すべき處を遁れぬれば、中々最期の恥あるなり。」とて、腹搔切つて死したるは、其の頃の武士の習なれば、義朝も、「合戰の場に罷り出でて、何ぞ生命を存ぜん。」といへり。されば賴朝が十四歲にして父擊たると聞きながら、自害をもせず、池禪尼にすがりて、かひなき生命を助りしを、時の人は善くも言はざりしなり。

池禪尼　平淸盛の繼母。

此の外、其の頃の武士道にて殊に著しき一箇條は、人々互に功名を競ひたることなり。爲朝が白河殿にて、「我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬやうに、たゞ一人いかにも强からん方へ差向け給へ。敵たとひ千騎もあり、萬騎もありとも、一方は射拂はんずるなり。」と廣言したるは、最も善く武士の氣風を言ひあらはしたるものにて、佐々木・梶原の宇治川先陣なども其の一例なり。

不覺

但し弓矢の道と云ひ、武士の道と云ふもの、畢竟自然に生じたる武士の面目律にて、多くは無意識の間に發達したるものなれば、此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、明かに區別を立て得べきものに非ず。さりとて其の面目律の制裁は、賴朝時代にても

無意識

中々嚴重にして、武士道に外れたるものは、武士の間には生きて居られぬ程なりき。たとへば、平治の亂に、所從の侍、藤原信頼を見限り、「此の殿は、人に頰を打たれて返事をだにしたまはねば、侍の主には叶ひ難し」と云ひしが如く、大將にして武士道の心得なければ、士卒附かず、侍にして名を惜しまず卑怯の振舞あらば、武士の間に齒せられざりき。而して此の武士道は東國に盛にして、都には流行せず。都は柔弱者の寄合なりしが故に、天下の勢つひに上輕く下重くなりて、日本未曾有の大改革とはなりたるなり。

然れども東國の強きのみにては、なほ天下を圖り難し。頼朝は北條・三浦・千葉・小山など云ふ東國武士の力を假りたると共に、大江廣元・三好康信など云ふ京洛の客を愛し、其の經綸の知識を用ゐたるなり。武士道も開化せざれば、たゞ強きのみ。天下の形勢を辨へ知る知識と武士道との二味が調合して始めて役に立ちしなり。

齒す

熊田葦城　名は宗次郎。廣島縣の人、文學者。
武衡　姓は清原、出羽の豪族、寛治元年源義家に攻められ、捕へられて殺さる。
家衡　清原武衡の甥、寛治元年義家に殺さる。
客心悠々
勿來關　常陸、磐城の國境。
模糊
繽紛
兵馬倥偬

五　勿來關

熊田葦城

—「愛山文集」—

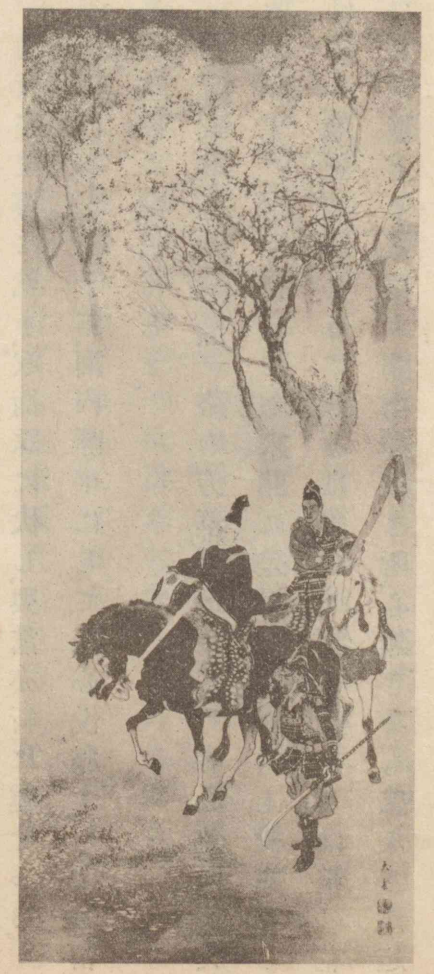
武衡既に縛に就き、家衡誅に伏し、與黨亦斬に處せらる。義家出羽を治むること十年、國内靜平にして民心悅服す。乃ち留守を置きて京都に還らんとす。

春風長閑に渡りて、一路の芳草馬蹄輕し。客心悠々、また戰時の秋に似ず。行き行きて勿來關に差掛かる。山上模糊として白きは雲か、地上繽紛として飜るは雪か。雲と見えしは梢の花、雪と思ひしは散りくる櫻。關山春深き所、心無き身も感などか起らざらん。兵馬倥偬の間に在りては、月を觀ても樂しからず、鳥を聽くも嬉しからじ。今や干戈既に戢まりて、襟懷特に安し。將軍駒を樹下に駐めて顧望すれば、冑も花、甲も花、身は何時しか畫中の人とな

る。逸興頓に湧きて、詩情自ら動く。

吹く風をなこそ、の關と思へどもみちもせに散る山ざくらかな

長亭短驛



勿來の關（小村大雲筆）

一返り二返り口吟みつゝ、永き日の暮れなんとするをも知らず。

かくて長亭短驛、日數を重ねて京に着す。百戰功を重ねて一門光を添ふ　來りて賀を述ぶるもの、門前市を成す。武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて語る。「陸奥は名所多き國と聞く。年久しく彼の地に在りつれば、皆それ〴〵に見候ひなん。是のみこそ羨ましき心地すれ。」と。義家畏まりつゝ答ふ「心長閑けく候はんには、ゆかしき事も候ふべけれど、軍に暇無き身には、優しき詠とても候はず。唯勿來關と申す所にて、花の散る樣の餘りに興深く、あはれ心あらん人に見せまほしく覺え候ひしが、其の儘に打過ぎなんも口惜しく、をこの口吟に任せてかくなん仕りぬる」とて、彼の吹く風の歌を打誦すれば、「實にも秀歌をこそ致しつれ。」とて、感歎特に淺からず。花は櫻木、人は武士。斯の人、斯の花を詠じて、花と人と千古に香し。

—「日本史蹟」—

六　春宵漫歩

夏目漱石

山里の朧月夜に乘じてそゞろ歩きす。觀海寺の石段を登りな

夏目漱石　名は金之助、文學者、大正五年歿、年五十。

觀海寺　別府市の西方にあり。

五山　建長寺、圓覺寺、淨智寺、淨明寺、壽福寺。

から、「仰數春星一二三。」といふ句を得た。余は別に和尚に逢ふ用事もない。逢うて雜話をする氣もない。偶然と宿を出て、足の向くにまかせてぶら〳〵するうち、ついこの石段の下に出た。しばらく「不レ許ニ葷酒入ニ山門一。」といふ石を撫でて立つてゐたが、急に嬉しくなつて登り出したのである。石段を登るにも骨を折つては登らない。一段登つて佇む時、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に、詩が作りたくなる。默然として我が影を見る。角石に遮られて、三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寢ぼけた空の奥から、小さい星がしきりに瞬をする。句になると思つて又登る。かくして、余はとう〳〵上まで登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。昔鎌倉へ遊びに行つて、所謂五山*なるものをぐる〳〵尋ねて廻つた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、

洒落

やはりこんな風に石段をのそりのそりと登つて行くと、門内から黄色な衣を着た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が鋭い聲で、「何處へ御出でなさる。」と問うた。余は只、「境内を拜見に。」と答へて、同時に足をとゞめたら、坊主はすぐに、「何もありませんぞ。」と言ひすてて、ずた〳〵下りて行つた。あまり洒落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭を振りたて振りたて、遂に姿を杉の木の間に隱した。その間かつて一度も振返りはしない。成程禪僧は面白い、きび〳〵してゐるなと、のつそり山門を入つて見ると、廣い庫裡も本堂もがらんとして、人影はまるでない。

余はその時に心から嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんなに洒落に人を取扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を心得てゐたからといふ譯ではない。禪

のぜの字も未だに知らぬ、唯あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。かうやつて、美しい春の夜に、何等の方針も立てずに歩いてゐるのは實際高尚だ。興來たれば、興來たるを以て方針とする。興去れば、興去るを以て方針とする。句を得れば、得た所に方針が立つ。得なければ、得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。

「仰(イデ)數春星一二三。」の句を得て石段を登り盡した時、朧に光る春の海が帶の如くに見えた。山門を入る。絶句は纏める氣にならなくなつた。即座にやめにする。

石を甃んで庫裡に通ずる一筋道の右側は、岡蹶躅の生垣で、垣の

鬼の念佛（京傳筆）

又平　元祿頃の畫家、大津繪の祖。

むかうは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で幽かに光る。數萬の甍に數萬の月が落ちたやうだと見上げる。何處やらでしきりに鳩の聲がする。棟の下にでもゐるらしい。

雨垂落の處に妙な影が一列に竝んでゐる。木とも見えぬ、草とは無論ない。感じからいふと、又平のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで、一列に行儀よく竝んで、踊つてゐる。その影が、又本堂の端から端まで一列に行儀よく竝んで、踊つてゐる。朧夜にそゝのかされて、鉦も撞木も奉加帳も打捨てて、誘ひ合せるや否やこの山寺へ踊りに來たのだらう。

近寄つて見ると、大きな覇王樹(さぼてん)である。高さは七八尺もあらう絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて、柄の方を下に、上へ上へと繼ぎあはせたやうに見える。あの杓子がいくつ繋がつたらお仕舞になるのかわからない。今夜のうちにも廂をつ

き破つて、屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來るときには、何でも不意にどこからか出て來て、びしやりと飛びつくにちがひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちにだん〳〵大きくなるやうにはおもはれない。杓子と杓子の連續が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹は、世の中にたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。

―「漱石全集」―

長塚　節

茨城縣の人、文學者、歌人、大正四年歿、年三十七。

凝然

七　蛙

長塚　節

春は空から、さうして土から微かに動く。毎日のやうに西から埃を捲いて來る疾風が、どうかするとはたと止つて、空際にはふわふわとした綿のやうな白い雲が、ぽつかりと暖かい日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、動きもせず凝然としてゐることがある。水に近い濕つた土が暖かい日光を思ふ一杯に吸

うて、その勢づいた土の微かな刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛のぢみな蕾は、目に立たぬ間に、少しづつ延びて、ひら〳〵と動き易くなる。その刺戟から、蛙はまだ蟄居の狀態に在りながら、稀にはそつちでもこつちでもくゝくゝと鳴きだすことがある。空から射す日の光はそろ〳〵と熱度を增して、土はそれを幾らでも吸うて止まぬ。土は凡てを段々と刺戟して、堀の邊には、蘆や、とだしばや、その他の草が空と相映じてすつきりとその首を擡げる。軟かさに滿たされた空氣を、更に鈍くするやうに、榛の木の花はひら〳〵と止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒きちらしてゐる。蛙は假死の狀態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな樣子をして空を仰い

蟄居

あふぐ

嫩葉

で見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、その長い睡眠から復活したことを、空に向つて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騷がしい聲は只空にのみ響いて快げである。

彼等は更に春の到つたことを、一切の生物に告げる。草や木が心づいて、その活力を存分に發揮するのを見ないうちは、鳴くことを止めまいと力める。

田圃の榛の木は疾うに花を捨てて、自分が先に嫩葉の姿に成つて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽かで且朗かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだためらうてゐる周圍の林を見る。

岬のやうな形に偃うてゐる水田を抱へて、周圍の林は漸くその本性のまに〳〵、勝手に白つぽいのや、赤つぽいのや、黄色つぽいのや種々に茂つて、それが氣が付いた時に、急いで一つの深い綠に成るのである。

煌めく

雜木林のそこらこゝらに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黑い瞳を聚めて、はづかしさうに葉の間からこつそりと四方を覗く。雜木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて春がふけたと喚びかける。さうすると、その同族の聲のみが空間を支配してゐるべき筈だと思つてゐる蛙は、その囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越え飛越え鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潛んで畢ふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、これを仰げばまばゆさに堪へぬやうに、その身を遙かに煌めく日の光の中に沒して、その小さな喉の拗ぢきれるまでは、劇しく鳴らさうとするのである。蛙は愈〻益〻鳴きほこつて、樫の木のやうな大きな常綠木の古葉をも、一時にから

りと落させねば止まないとする。

この時凡ての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に附いてゐた凡ての雜草が、爪立ちして只空へ空へと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをぐつとひきとめて放さない。それで一切の草木は土と直角の度を保つてゐる。

雲雀（酒井抱一筆）

冬の間は土と平行することを好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く土に直立して、各自に手に農具を執る。紺の股引を

撼がす

矜る

藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程、喉の袋を膨脹させて、身を撼がしながら、殊更に鳴きたてる。

白い絓（しけいと）のやうな雨は、水が田に滿つるまでは注いで又注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返し引返し働いて居る人々の周圍に、足下に迫つて、敏捷にその手を動かせ動かせと促して止まぬ。

蛙がぴつたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更に蛙は、ひつそりと靜かな夜になると、いかにも自分の聲が遠く且遙かに響くかを矜るものの如く、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を擽つて、百姓の凡てを安らかな眠りに誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は

消耗
覺醒

皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。

彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に、その覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に、全く朝の元氣を喚返すのである。草木は、遠く遙かに響けと鳴くその聲に搖られつゝ、夜の間に成長する。櫟や楢やその他の雜木は、蛙が鳴けば鳴く程、さうしてそれが鳴き止む季節までは、いくらでも繁茂することを繼續しようとする。そこには毛蟲やその他のあさましい損害が或は有るにしても、しとしとと屢〻梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力强い深い綠が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。

—「土」—

正岡子規名は常規、竹の里人とも號す、松山市の人、俳人、歌人、明治三十五年歿、年三十六。

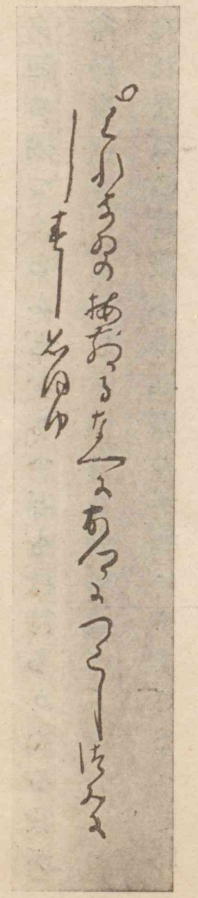
くれなゐの梅散るなへに故郷につくしつみにし春し思ほゆ

八　春の別れ

正岡子規

佐保神の別れかなしも來ん春にふたたび逢はんわれならなくに

いちはつの花咲き出でて我が目には今年ばかりの春行かんとす



正岡子規筆

病む我を慰めがほにひらきたる牡丹の花を見ればかなしも

世の中は常なきものとわが愛づる山吹の花ちりに

けるかも
わかれゆく春のかたみと藤波のはなの長房繪にか
けるかも
夕顔の棚つくらんとおもへども秋待ちかぬる我が
命かも
くれなゐの薔薇ふふみぬわが病いやまさるべき時
のしるしに
薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽つみしむか
し思ほゆ
若松の芽だちのみどり長き日を夕かたまけて熱い
でにけり
いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を
蒔かしむ

—「子規全集」—

くれなゐ。ふふむ

九　源平の三烈士

室　鳩巣

室鳩巣　名は直清、江戸の人、朱子學者、享保十九年歿、年七十七。

盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志を變へぬは、これまた士の常なり。もし時の模樣につきて覺悟を變じ、世話にいふ襟元につくやうにては、何をもて士と申し侍るべき。

水邊楊柳綠煙絲。立馬煩君折一枝。
唯有春風最相惜。慇懃更向手中吹。

これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり。この三四の句、意婉にしておもしろく覺え侍り。よりてその意を翁が詠める歌に、

なれてふく名殘やをしき青柳の手折りし枝をしたふ春風

楊柳の人に折られて、はや樹を離れたりとて、春風のそれをよそにして吹きなば、いかに情なかるべきを、なほその手折りし手を去

をしき。

こそ…侍れ

りやらで、惜しみがほに吹くこそいとやさしく覺え侍れ。古より忠臣・義士の盛衰存亡をもて心を變へぬに喩へつべく候。

翁むかし源平盛衰記を讀みて、源氏の士には渡部瀧口競、平家の士には彌平兵衛宗清がことを感ぜしが、また東鑑にて伊東九郎祐清がことを見て感じけるまゝ、三烈士の傳を半ば撰び置きしが、いまだ稿を脫せざるうちに池魚の禍に罹り、その後ふたゝび草を起すこともなく打過ぎしほどに、今はその文をば跡もなく忘れ侍り。

室鳩巣

渡部競は源三位入道頼政が所從の士には第一のものなり。然るに治承年中、頼政、高倉宮を勸めて兵を起しし時、京師を急に發して、倉皇として三井寺へ赴きしが、打忘れてやありけん、競にかくと

源平盛衰記　全四十八卷、著者未詳、源平兩氏盛衰興亡の跡を記せしもの。

東鑑　治承四年より文永三年に至る八十七年間の歷史、鎌倉幕府の編纂にかゝる、全五十一卷。

池魚の禍　「城門失レ火、殃及二池中魚一」（風俗通）

治承年中　治承四年。

倉皇

せまほし

ほくそ笑む

知らせざりしほどに、競しばらく猶豫して家にありしを、平宗盛聞きて、日頃競が魁偉なるを見て己が所從にせまほしく思ひしが、頼政が親臣なれば請ふべきやうもなかりしに、このたび競ひとり都に殘りしと聞きて、「六波羅に參れ。」と、人していはせければ參りけり。宗盛對面して、「汝今より我に仕へなば、入道の恩にはまさるべし。」とて、小糟毛といふ馬に貝鞍おき、乘替の料とて、遠山といふ馬を引きそへ、黑絲をどしの鎧・兜まで皆具してたびけり。競畏まり賜はりて、ほくそ笑ひして罷り歸りぬ。一族家人打寄りて、「入道殿これほどの大事を思ひ立ち給ふに、ひとりとり殘されしは、眞實に遺恨なり。大將のかく懇ろに語らひ給ふは、いなみがたし。『時の花をかざしにせよ。』といふこともあれば、たゞこのまゝにてあれかし。」といふを、競「いやとよ。勇士の義、さはあらず。」とて、宗盛よりたびける鎧着て小糟毛に乘り、郎黨七騎打連れて三井寺へとて打出でしが、六

波羅の門前を通りしとき、馬に乘りながら門の内へのぞきつゝ、高聲にいひ入れけるは、「競こそ只今下し賜はりし馬に乘り、三井寺へ罷り越し候。」御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れがたく候へば、この度死を共に致すにて候。御門前を空しく打過ぎんは本意なく候へば、御暇を申し候。」とて、三井寺に至り、頼政と一所になりしが、その後宇治橋の合戰に潔く討死してけり。

眷顧

彌平兵衛宗清は平頼盛の士なり。平治の亂に、頼朝幼少にて頼盛の家に囚はれしを、頼盛の母老尼、清盛に乞ひて死を救ひけり。その時宗清、頼朝を朝夕に勞りしが、平家西國へ落ちし時、頼朝かねて頼盛に通問して、疎意なきよしをいはせけるほどに、頼盛ひとり一門に叛きて都に留りけり。その後、平家いまだ亡びずして西海にありし時、頼朝舊恩を謝せんために、頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召具せらるべき由を、いひおこせられければ、頼盛關東に

疎意

赴くとて、宗清に「いざ、つれて下らん。」といひしに、宗清いひけるは、「頼朝某に下れと候は、定めて昔のなじみを思ひ出でて、所領引出物などして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとのことにてあるべく候。今更源氏に諂ひて、その蔭により候はんは、西海にある朋友どもの承る所も口惜しうこそ候へ。君はかくて都に御安堵しおはしましし候へども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜安き御心もあるまじく候。こゝにて思ひやり奉るも痛はしくこそ候へ。鎌倉に御越し候うて、頼朝某がことを尋ねられ候はゞ、折節勞ることある由を仰せられて給はり候へ。」とて、鎌倉へは行かざりけり。その後西海へ下りけるにや、その終を知らず。

なじみ

伊東祐清は伊東祐親が第二子なり。頼朝伊豆に流謫の時、祐親に依りておはせしが、祐親禁衛の役に當りて京師に赴きし間に、祐親が女頼朝の子を生む。祐親滿期に至りて京師より歸りし後、こ

流謫
禁衛

れを聞きて大いに怒りつゝ、その男兒を殺しけり。頼朝をも害せんとするを、祐清悲しみ、頼朝を深く愛護し、竊かに遁れ去らしむ。その後、頼朝兵を起して伊豆より相模に赴きし時、祐親平家の味方として、大庭景親等と石橋山にいたりて、頼朝を追ひ襲ひけり。その後頼朝すでに東國を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に到られし時、祐親を生捕りて到りしを、その罪を決するまで、祐親をば祐親が壻三浦義澄に預けられ、祐清を召出して勸賞を行はれんとありしに、祐清「たゞ御恩には、早く殺され候へ。父囚はれ、その子勸賞せらるゝ法や候。もし我を殺し給はずば、平家に歸すべし。」といふに、「さればとて、我を救ひし者を殺すべきやうなし。」とて、赦して放ちやりけり。

率ゐる。

勸賞

祐清それよりすぐに京師に奔りて平家に屬し、後篠原の合戰に終に討死を遂げけり。この三人、時代も大方同じく、志節も相似たり。その清風、高義、源平の間に求むるに、その類少なく覺え侍り。

—「駿臺雜話」—

一〇　乃木大將の殉死

徳富蘇峰

乃木大將の自殺は、深夜の警鐘の如く、青天の霹靂の如く、多大深甚なる印象を天下に與へたり。苟くも心ある者は、何人も皆自己に與へられたる一大鐵槌として、之を受用するを禁ずる能はず。而も若し乃木大將自殺の目的之に存すといはば、これ決して大將の本意にあらじ。恩賞は功勞に伴ふ、而も若し恩賞を邀へんが爲に、身を致して君國に奉ずといはば、これ忠臣義士の心を以て、單に商賣根性視する者なり。大將の一死を我に善用し、國に善用し、世道人心に善用するは吾人の責任なり。されど後人に教訓せんが爲に、時世を警醒せんが爲に、汚風惰俗に大鐵槌を下さんが爲に、特

徳富蘇峰
名は猪一郎、熊本の人、貴族院議員、文久三年生。

乃木大將
名は希典、山口縣の人、伯爵、大正元年歿、年六十四。

汚風惰俗

誣ふ

行徑

に自殺したりといふに至りては、これ乃木大將の心事を誣ふるや、亦甚だし。

吾人の所見によれば、乃木大將の自殺の理由は、その遺言書の第一條に於て盡したり。曰く、

乃木希典

自分このたび御跡を追ひ奉り、自殺候處恐れいり候。その罪輕からず存じ候。然る處、明治十年役に於て軍旗を失ひ、その後死處を得度く心がけ候へども、その機を得ず。皇恩の厚きに浴し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰、最早御役に立ち候時も餘日なく候折柄、このたびの御大變、何とも恐れいり候次第、茲に覺悟相定め候事に候。

と、大將自殺の行徑や、かくの如く明白なり。その心事やかくの如く光明なり。豈紛々聚訴の餘地あらんや。

豈…あらんや

二兒　長子勝典、陸軍歩兵中尉、明治三十七年南山に戰死す、年二十六。次子保典、陸軍歩兵少尉、明治三十七年旅順に戰死す、年二十四。

暗涙萬斛

吾人はこゝに乃木大將の事歴を說くの煩を要せず。彼は事ある毎に、その死處を尋ねたるに相違なし。二十七八年役に於ては、彼は旅團長として出征したり。即ち一部將に過ぎざりき。されど三十七八年役に於ては、彼は第三軍の將として出征したり。彼の責任や實に重大なりき。彼は二兒と共に家を出で、三棺竝べざれば、葬送する勿れ。」と家人に戒めたりき。彼も亦人の父なり。

山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場。
征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

これ南山役後の作なり。無心にして之を讀むも、なほ黯然たらざるを得ず。況やこの時に於て、彼の一子を失うたる事實を識る者は、彼の胸中の暗涙萬斛なりしを察して、自ら泣かざらんと欲するも能はざるなり。彼は本來多恨多情の好漢なり。唯武士道の錬

剛腸

磨の爲に剛腸の武夫たるのみ。日本武士道の精華は感情を發露するにあらずして、之を壓抑するにあり。一首二十八字、字々これ血液の結晶なり。

旅順攻圍軍は古今未曾有の慘烈なる經驗を嘗めたりき。中隊・大隊はおろか、殆ど聯隊の全滅さへも繰返したりき。而して豫期よりも半歲を超過して、漸く開城を見るに及べり。この役に又他の一兒を失へり。かくの如くして二棺は豫期の如く出來たり。他の一棺は如何。

王師百萬征強虜。　野戰攻城屍作山。
愧我何顏看父老。　凱歌今日幾人還。

彼は實に「一將功成萬骨枯。」の事實を痛切に感じたり。彼の鋭敏なる良心・責任心・廉恥心は、又もや彼を驅りて幾回か自決せしめんと欲したりき。されど彼は餘儀なくその死處を待てり。

一將功成「澤國江山入ニ戰圖一。生民何ノ計アッテ樂マンニ樵蘇一。憑リテ君ニ莫レ話ル封侯ノ事。一將功成ッテ萬骨枯ル。」（曹松）

沒交渉

先帝　明治天皇。

鑑奬嘉諒

晩節

三十七八年以後の乃木大將は殆ど軍服を纏うたる聖僧たりき。而も獨善は彼の屑しとする所にあらず。彼や結髮以來、尊王愛國の大義を聞き、治國平天下の大道を學ぶ。彼や滔々たる世潮に對して、固より沒交渉なる能はざりき。されば及ぶ限りは之を支持し、之を矯正し、彼の所謂躬ら行ふ所を以て之を他に及さんと欲したりしや明らけし。而して彼を學習院長に擢用し給ひたるは、これ先帝の明鑑にして、眞に適材を適所に置き給ひたるものなり。

彼や先帝の知遇を辱うし、特に三十七八年役以來、彼の孤獨なる家庭・淡枯なる生活、自損利他の行徑、奉公獻身の精誠は、深く先帝の鑑奬嘉諒し給ふ所となり、或は彼を軍職に大用せんとの議を上る者ありしかども、先帝は固く執りて容し給はざりし程なりき。これ彼を以て人の師表たるべき者と御推信ありしが爲のみ。彼の進路や、曲折頓挫、決して和易輕快なりと言ふを得ず。而もその晩

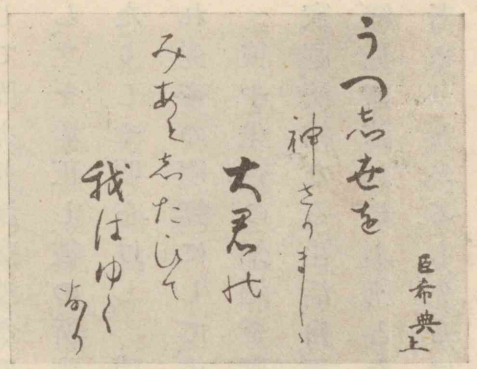
鞠躬盡瘁

臣希典上
うつし世を神さりましゝ大君のみあとしたひて我はゆくなり

南洲西郷隆盛。況や…をや

節に於て、聖天子の知遇を辱うす。彼や實に鞠躬盡瘁、老の將に至らんとするを知らざりしが如し。

然るを思ひきや、御發病となり、遂に崩御とならんとは。何人も彼の心中を知る能はず。されど彼や若し祈るべきものなりせば、畏れながら身を以て代らんと祈りしに相違なからん。彼は最後まで御平癒を信じたりき。而してそれさへ水泡に歸したり。彼がこゝに於て、一死を以て先帝に殉したるは、餘人に於てはいさ知らず、彼に於ては極めて自然なり。彼や死處を求めて、死處を得たり。單に死處よりすれば、南洲の企て及ぶ所にあらず。名を求むるにあらず、奇を衒ふにあらず、何ぞ況や他人に當てつくるに於てをや。



乃木希典の筆蹟

うつし世を神さりましし大君の御跡慕ひて我はゆくなり

只かくの如きのみ、これ以上の解説や註釋や、これ蛇足のみ。

蓋し乃木大將は先帝に殉し、その夫人は大將に殉す。彼等夫婦の死は、宛も先帝大喪儀の最も莊嚴悲哀なる誄歌を合奏したるものなり。かくの如くして豫期せられたる三棺は、豫期せられざる機會に四棺となりぬ。乃木家闔門皆國事・王事に斃る。明治・大正の過渡に於ける、血を以て描ける千古不朽の一大悲史は、かくの如くして出で來たれり。嗚呼、哀しいかな。

—「蘇峰文選」—

闔門

一一　岩倉右府

井上　毅

月日の小車はめぐりめぐりて流るゝ水よりも早く、故右府公の

井上毅　熊本縣の人、樞密顧問官子爵、明治二十八年歿、年五十二。

故右府　右大臣岩倉具視、明治十六年歿、年五十九。

輔翼　野々口隆正　石見國の人、國學者、歌人、明治四年歿、年八十。

時の帝　後醍醐天皇。

延喜・天曆　醍醐天皇、村上天皇の年號。

有職

世を去り給ひしより、今ははや十年あまりぞ過ぎぬる。

「大詔のまに〳〵、我が國を富士がねの安きに置かでやは。」と思ひ入り給へる公の一筋の誠心は、天地の間に滿ちわたりて、極みなき後の世まで語り繼ぎ聞き繼ぐべければ、今更にいふまでもなきことながら、公の逸事の一二を思ひ出づるまゝに書きしるして、世の鑑ともなし、史人の料ともなさん。

維新の初に、「神武の古に復る。」といへる大義を定められしは、この公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の說に、「建武中興の振はざりしは、當時の搢紳にその人なきによれり。源親房卿は學識ありて、時の帝の御覺えもめでたかりしかど、その人の所見は延喜・天曆の跡に復るにありて、神武の古に復ることを知らず。さてこそ公家・武家の間に隙を生ぜしなれ。」といへり。

故右府公は搢紳・有職の家に生ひたち給ひしかど、夙に大勢を達

百揆

盤根錯節

岩倉村　京都府宮郡。

觀して、王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐるために、「神武の古に復る。」といへる一大義を唱へ給へるは、これぞ明治の朝廷に人ありとは申すべき。この一大義は百揆・庶政の原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根錯節をば、すべて破竹の勢を以て破りたり。世の人は、政治の中興は五百年來の武門の政を破りたるなりと、思ふらめど、心ある人は、溯りて天平以來の宿弊の更に破りがたきを、破られたることを知るならん。

岩倉具視

徳川氏の大政を返上せし際には、公は譴を蒙りて、久しき間岩倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄に召しによりて夜中參內し給ひけり。このをり公は一つの大囊を携へて宮中に入り給ひ

玉松操　京都の人、勤王家、明治五年歿、年六十三。

親政の洪圖

しが、嚢中の文書は皆公の蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。この時大勢なほ定らずして、物論紛々たるに、公は俄に躬を以て責に當り、從容應答して、雄藩の主もために容を改め、朝議大いに決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、内は攝關・議奏・傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の内に定め、後世動かすべからざる基礎を建てられたるは、實に公の輔翼の力なり。就中復古の第三日に、禁闕に達文を掲げられて、女房の請謁を納るゝことをいたく禁止せられたるは、これぞ數年の宿弊を除き、將來のために一大美事を遺したる。」として、公の晩年に親しく物語り給ひき。この一事は扇の要なりとは、知る人ぞ知らん。

維新後の公が翼贊の功は、明治大御史と俱に後の世に傳ふべきなれば、こゝに書續くる要なけれど、公は己の勞を露ほども誇り顔

ぞ…める

こそ…(あれ)

征韓の議　明治六年、副島種臣・西郷隆盛・江藤新平等によつて唱へらる、岩倉公はその反對論者なりき。

に人に語り給ふことなかりしほどに、史人もえ知らぬことぞ多かめる。世の人は、明治二十年と二十二年との條約改正中止の件を、何某の盡力にて、となりし、かくなりしなど、事々しくいひはやせど、この事の起りは十五年にて、公は飽かず思しめすことありて、一方ならず心を盡し給ひ、そのをり一たび中止とはなれり。されども、公は深く祕め給ひて、文書一箱ほどもあるを家に藏めて出し給はざりしかば、内々の人ならではえ知るものなかりき。これ等は後の人の鑑にこそ。

剛膽は政治家の第一要德なりとぞ聞ゆる。公は長袖の人とも覺えぬばかりに、剛毅の德を具へおはしけり。征韓の議今にも蕭牆の内に變亂を見んとする時、陸軍將校の中にて武勇の聞えある一人は、公の邸に參り客室に謁見し、一應二應議論の末、その人怒れる眼血を濺ぎ、毛髮逆さまに竪ち、脇差を左の手にて鞘も撓むばか

りに握りつめ、「貴殿若し意見を枉げ給はずば、御身のために惡しかりなん。」といひ放ちつゝ、膝と膝の間一尺許りにまで詰めかけたり。この時、公の家の侍ども次の間に控へゐて、障子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりしに、公は少しも動ずる色なく、自若としてその座を守り給ひきとぞ、內の人の物語りし。

公の畏きあたりの御覺え殊にめでたかりしは、世の人の知るところなるが、大君の御爲とならば、我をおきて人はあらじと思ひ給へる隱さはぬ明き心の深かりしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか。雲の上のことは筆に載するも畏ければ洩らしぬ。

公は大久保內務卿と心交特に深くおはしき。岩倉村蟄居の折より、大久保卿は密々の往復頻りなりしが、「公の身の上心もとなし。」とて、夜な夜な年少なき侍を遣して、守衛せさせつることもありしを、公は知り給はざりき。西南の亂平ぎし後、兩公の間に契り給ふ

あはや。

君臣水魚　蜀漢の劉備と諸葛孔明との故事。

大久保內務卿　名は利通、維新三傑の一人、明治十一年歿、年四十七。

ことありしが、日ならざるに大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に、「世の人大久保の志を知りたらんには、いかばかりか哀しみ思ふらん。『維新の初十年間は創業・撥亂の時なりき。これより後十年こそは、內治を整理し民利を進むる時なれ。』とて、將來のために大いに計畫するところありしに、料らずもかたみの言葉となりぬ。」と宣ひき。

撥亂

公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、また厚く國體の基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて、宮內省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺制の貴きことを世に知らせんための計らひとぞ聞えし。

國是

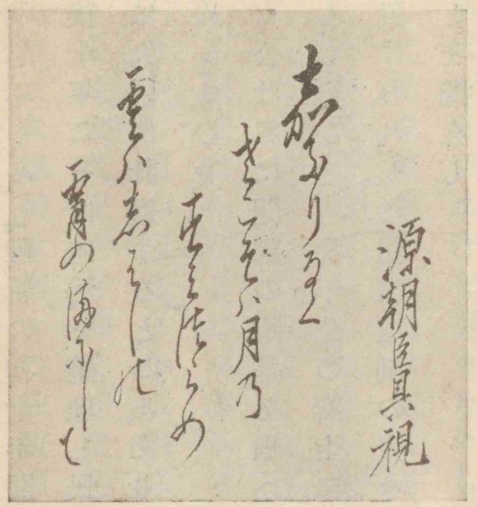
公は勤儉の二字を大政の本として、輔弼に心を盡させ給ひき。また家を治むるにも儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、「岩倉村の蟄居の時をな忘れそ。」とて常に公達を戒め給ひけ

な…そ

家範

源朝臣具視
かきりなくさ
こそは月のす
みつらめ雲は
しはしの宵の
まにして

り。薨去の前、家範を作り、「後の世まで守り文にせよ。」とて、子孫に遺し給ひしがその附錄一篇は專ら奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の床にましく つゝ、親しく旨を授けて、さむらふ人に筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が案文に調印せしは七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今はの際の遺言にも、「己の墓石は父君の墓石の寸法に準へよ。」とありきとなん。



岩倉具視筆蹟

公は日に夜に公のことにのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせ給はざりき。朝五時前には目を覺し、「侍やある。」と聲かけさせ給ひ、「今日は何某をば何時に召せ、次に何某をば何時に呼べ、また、

心づくし

かづく

進退

明日は何某に朝何時に來れ、何某に夕何時に參れ、と記して申し遣せ。」など仰せられき。多くの公達は父君の代筆として、文書くことに忙しかりきとなん。

公の病に侵され給ひつるは、明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年の頃より、何となく、あらざらん後の世の心づくしの節々を、知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同年の冬、或人の許に贈り給へる書の末に、

さりともとかきやる浦の藻鹽草たが下り立ちてかづきあぐらん

とぞありし。先立つも後るゝも世のならひとはいひながら、御國のために行末を思ひやられし公の心こそいとあはれなれ。

公の平生の仰せに、「大臣たるものは、その身の進退によりて節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多

きぞ口惜しきことの極みなる。我こそ躬を以て人臣の標準を示さめ。」と宣ひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げんことを思ひ立ち給ひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしも聽入れず、「是非に。」とて歎き請ひ給ひしかば、上には忝くも誠あるこゝろばへを酌ませられて、その請を聽屆けさせ給ひ、厚き惠の御勅をさへ下し給ひけり。かくと承りて、公はさしも重き衾を押しのけ、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、急ぎ家の子等を召しつどへられ、「今日こそは病の輕きを覺えたれ、それ杯まゐれ。」とて、酒を賜ひけり。人々歡びの色をなしたりけるが、さてその翌日に事重らせ給ひぬるぞかひなき。今はの際まで、夢幻の間にも、公のことのみ心に懸けさせ給ひ、なからん後のことまでも、人もて雲の上に聞え上げまゐらせしもありきとなん。

—「梧蔭存稿」—

つどふ

上田　名は萬年、名古屋市の人、文學博士、貴族院議員、慶應三年生。

松井　名は簡治、千葉縣の人、文學博士、東京高等師範學校教授、文久三年生。

喜悅

一二　學者の苦心

芳賀矢一

十年一昔といふことを思ふと、上田・松井の二君が國語辭書の編纂に着手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晩餐會に招かれてうち興じたのは、ついこの間のやうな氣もするが、その頃、始めて小學校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで人の子の母となつて居る。短いやうで長いものである。今やその第一卷がいよ〳〵出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、而もそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

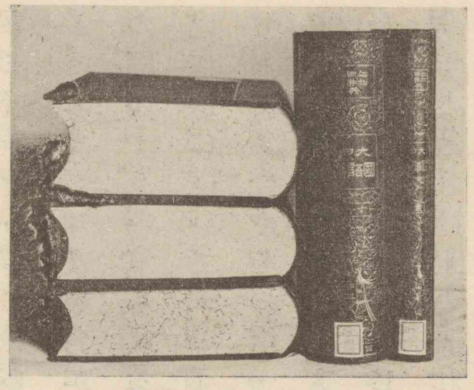
年の流れは水の流れと同じく、世事の變遷は行く雲のやうに極りがない。この一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や、軍事や、工業や、貿易やの進

えろ

拾集

歩發展の跡を見ても、その間の十年は通常の十年では無かつた。二君の編纂事業はかういふ中に、徐々とその工程を進めて行つたのである。

鑛山から掘りだされて、えり分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬幾十萬となく古語や新語が、幾百部幾千部の典籍・圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書きとめられ、整理せらる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月・二月・三月・四月、秋も暮れ、春も逝いて、暦も幾たびか改る。同じ仕事がはてしなくいつまでも續く。傍から見れば、捗の行かぬことは齒痒いやうて何時片のつくことかと危まれる程であつた。編輯室は松井



大日本國語辭典

肝を冷す

拮据

君の邸内の離れ家にあつたが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾たびかわからぬ。二君の筆と頭腦は間斷なくこの間に活動して、採るものは採り、棄てるものは棄て、その進歩は遲いが、その成果は確實であつた。かくて粒々積みあげた砂子も遂には山を成す喩のやうに、編纂の稍緒に就いたまでには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は、幾隻となく進水式場に浮び出たのであつた。

學者の仕事は地味である。目覺しく世人を驚かすやうなことは無い。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども、一たびその室に入つて山成す材料を見上げるものは、何人と雖もその難事業たることを承認せずには居られぬ。又編纂者の決心と根氣を尊敬せずには居られぬ。さうして、それが決して學者の閑事業では無くして、實は國家的大事

業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて國家教育の根柢となる國語の調査・整理が現今に緊急であることはいふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國とはいはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に賴らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狹い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絕大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて、鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大いに增加したのを祝賀する人は、これと同時に數隻の巡洋艦位で滿足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、こゝに一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つた事を驚歎し、嘆美しなければならぬ。文物を整備するのは國家の誇であり、飾である。又精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國

民にとつての立派な强みになる。この一大產物が堅忍不拔な二君の手によつて成就せられた事は、友人たる余のいひ知らぬ喜悅を感ずる所以である。この十年は國語界に於ても、亦無意味な十年では無かつたのである。

學者の事業はいつも世間と沒交涉なものでは無い。專心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、進步して行く世間を一日も餘所に見て居る譯には行かぬ。

十年一昔の間には、國語そのものの中にも絕えず變遷が行はれて居る。それに注意するだけでも容易の業では無い。靜寂な編輯室は、紛糾した實社會と常に相往來して居るものである。

幾多の困難にうち克つて、國民の覺知せぬ間に、その背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるに及ばぬ。

沒交涉

紛糾

後世の人は必ず之を明治時代に企てられて、大正時代に完成せられた大事業の一つに數へるであらう。

余は二君の滿足と喜悅を察知すると同時に、今か今かと十餘年を待ちくらした同友と共に、先づ二君の成業を祝して一大白を浮べようと思ふのである。

—「大日本國語辭典」—

一三　袁大總統に寄す

大隈重信

大隈重信　佐賀市の人、政治家、教育家、侯爵、大正十一年歿、年八十五。

袁大總統　名は世凱、中華民國最初の大總統。（西暦一八五九—一九一六）

有賀博士、

東亞兩國休戚同じく、遙かに北燕の天を望んで高風を仰慕まかりあり候。まづ以て大總統閣下豐功偉烈、日に御繁盛欣賀に堪へず候。陳ぶれば、先般貴國汪代表御訪問相成り、貴電拜誦、有賀博士貴總統府法制顧問として御延聘に關する御依賴の趣、承知仕り候。

惟ふに貴國維に新に、中興これ始る。邦基の永く固からんことを欲せば、その初を愼まざるべからざる儀と存じ候。仰せの如く、

名は長雄、大阪府の人、法學博士、文學博士、大正十年歿、年六十二。

泰斗　絶無稀有

桂首相　名は太郎、山口縣の人、軍人、政治家、公爵、大正二年歿、年六十八。

柴田文相　名は家門、山口縣の人、大正八年歿、年五十八。

青柳教授　名は篤恒、早稲田大學教授、明治十年生。

諮詢

有賀博士は學深く理遠く、名譽を世界に馳せ、東方學界の泰斗として、殊に前清時代立憲問題に就いて淺からざる關係もあり、旁〻今回貴總統府法制顧問として御招聘の御希望、誠に絶無稀有の適材と存じ候。

たゞ同博士は先年大患に罹り、今に全治に至らず、且帝國大學に於て擔任せる我が皇室に關する講座の事に關し、繰合せの儀何分容易ならず候ひしが、鄙人より桂首相及び柴田文相とも再三相談の結果、日支兩國の關係密切にして、他國と同日の比に非ずとの事にて、兩相よりも切に博士の應聘を周旋せられ、病を扶けて赴任の事と相成り申し候。尙同博士より早稲田大學青柳教授を擧げて襄助員として、公務を輔佐する事と相成り申し候。

博士入京の上は、大總統閣下よりは鄙人に對する同樣、誠意を以て迎へられ、日常左右に延きて法制上の御諮詢賜はり候はば、博士

に於ても勿論精力を傾盡して、以て貴總統知遇の至意に酬ゆる事と存じ候。

鄙人野に在り、閑を賦する今に二十載、その地位や自由にして獨立、權勢の羈束する所とならず、政府の掣肘する所とならず、言ふ所皆個人の機軸に出で、行ふ所亦私人の誠衷にあらはるゝものに御座候。

羈束

思ふに日支兩國、國相異なれりといへども、抑、私人の交際に至つては、深く國際の關係を問ふべきに非ずと鄙考致し候。爾後若し鄙人相當の御用務も有之候場合には、何事なりとも御覆藏なく御相談相成りたく候。鄙人に於ても亦必ず思うて而も言はざるが如き事萬これなかるべく候。鄙人我が日本の維新に直接關係せる經歷上、貴國の維新に就いても、懷舊の餘、御同情に堪へざるものに御座候。

覆藏

今や東方多事隨分御加餐禱り上げ候。

大正二年二月二十七日　　大隈重信

袁大總統閣下

—「書翰文講話及び文範」—

加餐

一四　初夏の京城

尾崎喜八

尾崎喜八　東京市の人、詩人、明治二十五年生。

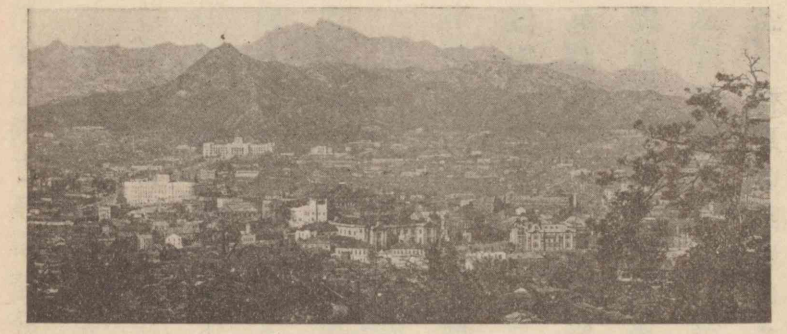
初夏が來ると京城を思ふ。あの山の都の上にひろがる、異常に澄んだ青空を思ふ。あらゆる街路を美しくする朝鮮婦人の輕やかな着物とその色彩を思ふ。そよ風の吹く明方から、もう青い朝霧に卷かれて、虹のやうに浮上つてゐる南大門、東大門の諸門を思ふ。それから太平通から光化門へかけてのアカシヤの並木を思ふ。初夏の京城こそ美しい都である。

アカシヤ　Acacia.

溫突　朝鮮固有の防寒設備。

倦怠

ポプラ Poplar.

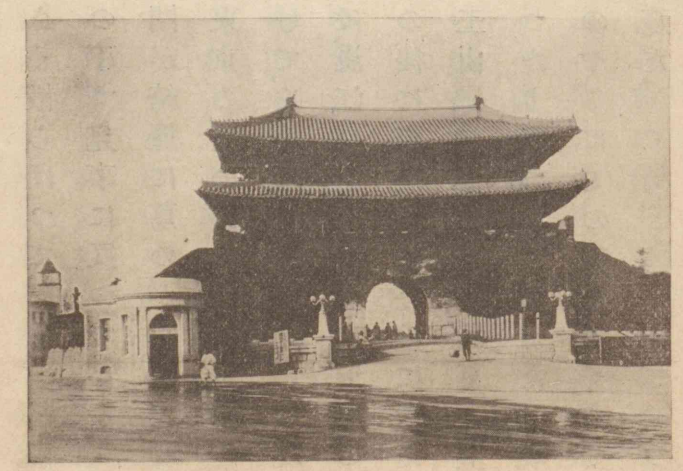


京城市街

うね〳〵と長い本町通の道が乾いて平かになると、冬中耳についてゐた高麗鴉の嗄聲が、町の雜音にまぎれて聞えなくなる。溫突のむせつたい、しかし憂鬱に懷かしい青い烟と、あの永遠な倦怠と寂寞な冬が鴨綠江の彼岸へ去つて、春が來たのだ。否、春と夏が同時に來たのだ。活氣に滿ちた樂しい生活の時が來たのだ。京城はよみがへる。人の心もよみがへる。太陽は花だ。空氣は胸もすく飲料だ。巨大な鯨のやうに横たはる南山の蜒々たる山麓へ、桃・櫻・連翹・杏・どろの木・アカシヤ・ポプラ、花と綠の五月初の大波が打寄せる。

多彩

都全體が明かるくなつて、多彩の舊都を三韓以來のそよ風が吹きわたる。人々は、何かしら浮き浮きとした自由な氣持になつて、夕方から夜にかけての本町通や鐘路大通は、きら〳〵光る電燈の明るさのうちを、散歩や買物の人のなだれが渦卷く。鋼のやうにかん〳〵凍てついた冬の日、三越呉服店前で奇妙な聲を顫はせながら、金色に焦げた燒栗を賣つてゐた人が、いつの間にか花賣に變つてゐる。冬中霜にちゞかんでゐた商店の陳列窓がすつかり透きとほつて、買物をしたい陽氣な心をそゝり立てる。南山



南大門

燦々

じくざく

の公園に立つて、遠く光化門通を眺めると、白茶の路が帶のやうに解けて、白衣の人の姿が蟻よりも小さく散らばつてゐる。昌德宮の屋根の綠青色の瓦が、大きな太陽の下で見事に反つてゐる。燦燦とした木立の茂みの間から、南大門が綺麗に蔦のからんだ頭を出してゐる。奉天行、仁川行、さては東京の空の懷かしい釜山行の列車が、龍山から漢江の長い鐵橋かけて、白い烟を吐きながら玩具のやうに動いて行く。鐵橋の向うは、漢江の水の紺碧に、河原の砂の眞白な鷺梁津の、小さい村だ。その後に南漢山が莊重に横たはつてゐる。正面は北漢山・三角山・仁王山。じくざくと初夏の空をかぎつて、その山腹を昔の城壁が上つたり下つたり、消えたり現れたり、幾つかの門を球と貫いて、珠數のやうにこの都をめぐつてゐる。あゝ初夏だ。大陸の大きな初夏だ。

袷を着る季節はごく短い。街路樹のアカシヤに花が咲く頃に

輕羅

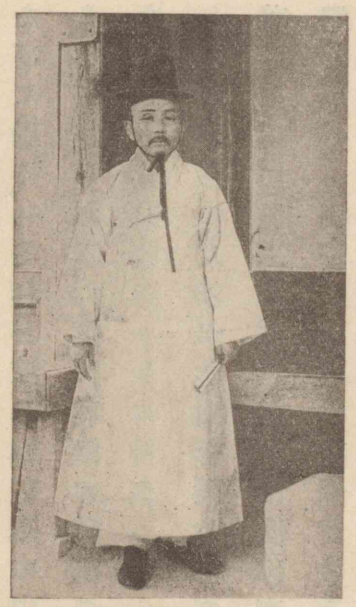
遊山

なると、人々は薄い周衣の輕羅の裳をひら〳〵させる。びたりと分けて小さく束ねた眞黑な髮の毛、薄化粧の顏、三日月のやうな細い眉毛、優雅な朝鮮婦人の淡彩の衣服の胸に結んだ長い紐が歩くたびに動く。それが涼しい電車の中や、廣い明るい往來の到るところで見られる。實に朝鮮の美術の精神が、彼等の姿のすべてにある。

昔ながらの人々が遊山を樂しむのもこの時である。それは字義通り山で遊ぶので、京城では廣い南山一帶の低い松林の斜面が選ばれる。樹蔭の少ない花崗質のうね〳〵と續いた山腹を、正午の靜寂のなかで、あてもなく散歩してゐると、意外な處から笛と鼓の音が聞えて來る。それに交つて甲高な、間のぬけたといへばいへる歌の聲が傳はつて來る。純粹に朝鮮の服裝をした男が五六人、地面の涼しい處に布を敷いて奏樂をやつてゐる。笛を吹く若

生粹

者、趺坐の間の鼓をたゝく老人、歎くやうに訴へるやうに、はてしなく續く單調な歌の節が流れる。それはさながら太古の民の素朴純眞な遊山である。この音樂はたなびく烟を思はせる。この國の古い美術に現れた優美な線を思はせる。石佛の線を、また壺や皿にゐがかれた雲や草の自由なわだかまりのない線を。



男　裝

鐘路通の初夏の夜こそ賑やかだ。電車道の兩側には、ポプラの竝木が夜目にも青く新綠をつらね、東京の綠日を思はせる露店がずらりと竝ぶ。賣る品物も東京のと大差はない。しかし商人も、散歩の群集もすべて生粹な朝鮮人だ。そのよく饒舌ること、それは正に一箇

饒舌の川

淳朴

の饒舌の川だ。始めて聞けば、罵りあつてゐるのかと思ふ。競賣、能書ならべ、說明、ひやかし、惡口。そしてのんきな人間はいつまでもいつまでも、ぼかんと一人の商人の饒舌に耳を傾け、氣永に石鹼や齒磨粉の試驗管實驗をながめてゐるのだ。これも內地と變りはない。たゞそれをしやがんで、ゆつくり聽いてゐる閑人がある。くらゐが內地と違ふ點だ。南山の絕頂の岩や、倭城臺の高みから、半日くらゐしやがんだまゝで煙草をふかしながら、彼等の都の風光を眺め暮す者は珍らしくない。俗にいふ立話が、朝鮮ではしやがみ話である。冠に盛裝、眞新しい草鞋をはいて、彼等は往來で會話したり、議論したりする。もとより若い教育のある者はそんなことはしない。しかし白髯の美しい老人が、彼等の悠長なしやがみ話をしてゐるのを見るのは美しい。都會にゐながら淳朴な田舍にゐるやうな氣がする。

目まぐるし
傳統

この古い都が到るところ青葉で飾られる初夏は、内地のやうに目まぐるしくなく、こせつかず、悠々として一切の事物が大まかな日光や、空氣や、風俗や、傳統と調和する。それを味はふには、昔の王宮附近一帶の町の方がよい。貞洞や孝洞の細い町筋で、閑寂な五月六月の美しい晝間遊んでゐる朝鮮人の子供のかはいさや、餘り姿を見せぬ町家の主婦たちを見るのは、私たちにはうれしい。そこには淳朴がある。そこで古來の美がよく護られてゐる。一切が一樣の空氣にとけこんで、この國の由緒ある歴史を知らずしていかしてゐる。朝早くから馬上の心も輕く、東大門をくゞつて淸涼里への道すがら、あの朝鮮特有の柔かな線をもつた藁屋根の低い家々を見るのは樂しい。小山や丘の形さへ同じやうにゆるやかな線をもち、所在にポプラの青葉が長い髪をゆすつてゐる。崇仁面の田舍ではもう蟬が鳴いてゐる。のどかな電車がアカシヤ

の長い並木を走つてゐる。風光は奈良や京都の郊外よりも少し憂鬱でありながら、大陸の氣息が何よりも心をひろげる。その思ひ出の多い初夏が又めぐつてきたのだ。

—「新文學選」—

一五　森

與謝野　寛

與謝野寛
京都市の人、慶應義塾大學講師、歌人、文學者、明治六年生。
めぢ
神さび

駿河なる富士の麓の大裾野、
高原くれば、はろ〳〵とめぢは擴ごり。
こゝに今直立の木の大木の
杉のひとむら、眞黑にも神さび立てり。

木の蔭は吹雪に、雨に、炎熱に、
旅ゆく人を憩はせて、千尋に延びぬ。

やちまた

この森をかなめとしては、八岐に
路のわかれぬ、末廣の扇のかたち。

わかみどり、野は春草の色萌えて、
霞める空に揚雲雀優に歌へり。
中をゆく路はおの〳〵面白し、
甲斐へ、武藏へ、相模路へ、都の市へ。

こゝにして、今感ずるは、いにしへの
菩提樹下なる正覺の聖のこゝろ。
八岐の路の何れも行くによし、
わがゆく方はやがて皆うら安の國。

正覺の聖　釋迦が菩提樹下に於て大悟せることをいふ。
うら安

—「櫛の葉」—

一六　波と船唄

木下杢太郎
本名太田正雄、靜岡縣の人、醫學博士、東北帝國大學教授、明治十八年生。

諧謔

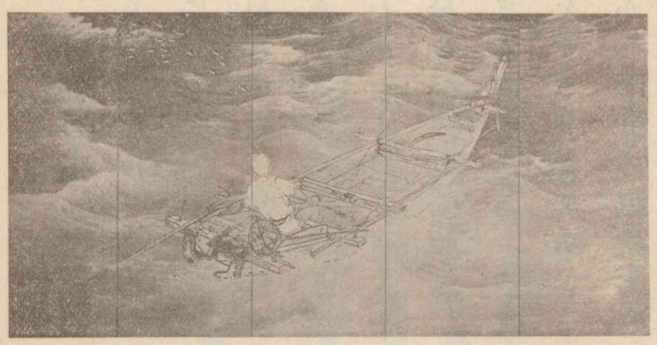
築墻

一條の微かな波の高まりが、あるかなきかのやうに海原のほとりから離れて來て、だん〳〵色は濃く、形は明らかになつて、——人に擬していふならば、或諧謔を思ひついた人が、遠くから話相手と目ざす人に笑ひながら近づくやうに——この波の高まりもだんだんと渚に近寄り、遂に笑の破裂するやうに「ざ、ざ、ざ、ざ、ざ、……」とさわがしく黑くさゝやき、かくて沸騰せる波頭は「ざつくろん——」と長く引いて碎ける。青い水の築墻は全く白い音の泡となつてしまふのである。それから水は磨かれた蛇紋石のやうな滑かな渚をすべり、「ざゝあゝ——るろ、るろ、るろ——」といふやうな優しい、しかし彈性の抵抗ある音と言葉を立てながら、さうしてまた靜かに「すら、すら、すら……」と引いて行くのである。もうその時は第二の

波が高まつて、既に波頭が散りはじめた時であつた。――かうして波は飽かず優しいいたづらを續ける。で、その引いてゆく波の一筋、泡の一つ一つにまで、折しも西山に近づいた夕日の影が斜に當つて、かくて石鹼玉の色のやうな美しい夢の模樣を現すのである。

このやうな波の主な運動の間に、また長い小説の插話に比ぶべき小さい葛藤がある。殊に渚を引く波の歸るもの往くものの間に、かの蟻の挨拶のやうな表情、輕い優しいさんざめきがあるのである。

靜かに心を鎭めて、この波のなす曲節を聽いてゐると、かの漁夫の集會の時に歌ふ船唄の調子を思ひ出さ



海　（小村大雲筆）

插話

さんざめき

ずにはゐられなかつた。波がこれを生んだといつては餘りに牽強ではあるし、しかし海や波、その心持がこの唄の曲節と深い關係のないといふ事は全く考へられない。その唄のゆるやかに流れてゆく時、突然音頭を取る人の高い轉向に驚かされる事がある。それは突然大きい波が碎けた時の心持によく似てゐる。またその唄の中に、高い問答のやうな調子が長く續くところのあるのは、濱邊の聲高の生活が靜かな夕波の曲節を崩すのによく似てゐるのである。

—「地下一尺集」—

牽強

轉向

高山樗牛　名は林次郎、山形縣の人、文學博士、明治三十五年歿、年三十二。

一七　夕陽の美

高山樗牛

夕陽の美は、西洋では、あらゆる美中の最も美なるものの一つとして數へられてゐる。それで苟くも自然の美に興味をもつてゐる詩人は、皆口を極めてその美を歎美してゐる。ベイン*のやうな

學者ですら、その心理學書で、美しいものの例に夕陽と、星と、百合の花との三つを擧げてゐる。我が國の文學にも、夕日影とか、夕映とかいふ文字は見えてゐるが、その崇大な光景を想はしめるに足る一首一篇だにないのは、いさゝか不滿足の感がある。

ベイン Alexander Bain. 英國の哲學者（西暦一八一八―一九〇三）。

夕映

夕陽はうるはしいが、その中でも、海の夕陽ほどうるはしいものはあるまい。自分は奥州の西海岸に育つたものであるから、海の日沒の景色は、自分には牢固たる印象を留めてゐる。あの夕べの雲のいろ〳〵なたずまひ、それに映えうつれる夕陽の光の濃き淡き、それに伴なつて大海原のいろ〳〵に彩られたる、これ等の一切が、日の傾くにつれて、形も色もそれ〴〵變りゆく有樣、殊に大空の色の暮れゆく具

高山樗牛

牢固

合などは、繪にも筆にもあらはし盡し難い。

海の夕陽に對して自分の起す感情は、常に「平和」である。譬へば、世界のあらゆる障碍にうち勝つた大勇者が、今方にその最後の戰鬪を後にして、榮光と平和に擁せられながら、靜かにその墓門に凱旋するといふやうな趣がある。夕陽の景色はいかにも崇大光明ではあるが、その全體の上に、どことなく疲れ憊れた老衰な趣があることは、自分にはどうしても爭はれない感情である。これを譬へば、朝日の景色のよろづいき〳〵として、今將に戰場に上らうとする初陣の勇士の概あるに較べれば、兩々相對して、さながら人生の兩端を現示してゐる趣があるではないか。

あゝ、人や、その青年は朝日の如く、その晩年は夕陽の如くありたいものではないか。爭を經ない平和は、平和たる價はない。我等は一生の戰鬪にうち勝ち、榮光の雲につゝまれて、靜かに西方の天

に入りたいものではないか。あゝ、海の夕陽はうるはしいが、海の夕陽に似た人生の晩年は、更にうるはしからうではないか。

—「樗牛全集」—

一八　一口噺の詩趣

幸田露伴

幸田露伴　名は成行、東京市の人、文學博士、慶應三年生。

散文

滑稽諷諧

一口噺は尊び重んずべきものなり。たゞ一口にいひつくさるべきほどの語を以て、其の形を成せるものなれば、外觀はもとより立派ならず、また和歌・俳句の如く一定の約束の下に成りて、或詩形を有するものにもあらざるを以て、打見たるところは美を缺くに似たり。されども、これも亦戲曲・小說・詩・歌・句と同じく空想の產物にして、其の形狀よりいへば散文に屬し、其の系統よりいへば戲曲または小說に連り、其の性質よりいへば滑稽諷諧を旨とする「一の小なる詩」といふべきなり。

人若し一口噺の佳なるものを聞く時は、身は暫時にせよ、現實の世界の繫ぐところならずして、直ちに其の詩趣の中に攝取せられ、思はず知らず口を啓き聲を發して、輾然として一笑するを免れざるべし。かくの如き笑は、卽ち戲曲・小說等のをかしきものによりて發せしめらるゝ笑と同種類の笑にして、其の間に何の差あることと無し。一口噺はもとより戲曲・小說等と共に同種類のものたるを以てなり。

輾然　をかし

一口噺と、滑稽諷諧を主とする他の詩的製作品との差異は、たゞ其の單と複と、小と大と、粗と密と、淺と深との差異のみ。其の詩たる所以に於ては卽ち一なり。

漢詩・和歌・俳句等は一定の形式を有するを以て、其の形式をだに具備するものを見れば、昧者は誤つて、これ漢詩なり、これ和歌なり、これ俳句なりと思へり。されども、若し其の漢詩なり、和歌なり、俳

耳目を假さず

句なりと目せらるゝものにして、看るものに何等の詩的感興を與へざる時は、其の形に於ては詩にして、其の質に於ては詩ならざるなり。たゞこれ二十八字なり、二十字なり、三十一音なり、十七音なり、所謂「たゞごと」として深く嫌はるべきものなり。

然るに、漢詩・和歌・俳句等は、一定の形式の存するあるが爲に、却つて「たゞごと」をも誤つて目して漢詩とし、和歌となし、俳句となせる場合の甚だ少なからざるは、世上一般の事なり。

これ實は漢詩の面白からぬもののやうに目せられ、和歌の興味無きもののやうに噂せられ、俳句の淺薄なるやうにいひ做さるゝに至る所以にして、漢詩にとりても、和歌にとりても、俳句にとりても迷惑千萬の事といふべし。

一口噺に至つては、もと一定の形式無きを以て、其の詩趣もし缺乏せる場合には、如何なる人もこれに耳目を假さずして、直ちにこ

擯斥

無邪

れを擯斥すべきが故に、其の內容の詩的ならざる以上は、自ら存在する能はざるの情あり。これを以て、一口噺は其の外觀の詩歌等に劣るに比して、其の內容に於ては所謂「たゞごと」ならざるもの、卽ち詩的なるもの寧ろ多きの傾ありとす。予が此の言を疑ふものは先づ一口噺を讀みて、これを他の詩歌等に比し、いづれか人をして詩的興味を感ぜしむること多きかを檢すべし。

人をして泣かしむるも詩なり。人をして笑はしむるも詩なり。すべて人をして實の世界を離れて、虛の世界に遊ばしめて、而して無邪の感想を起さしむるものは詩なり。一口噺は詩なり。尊び重んずべし、侮り輕んずべからず。俗諺には時に不滅の眞理あり。一口噺には或は不朽の詩趣あるべし。能く俗諺の佳なるものを作れるものは、其の人蓋し無名の賢人なり。能く一口噺の佳なるものを作るものは、其の人恐らくは文を屬せざるの詩人なるべし。

愛重すべきかな、一口噺と其の作者と。　—「洗心廣錄」—

一九　雷のすし

○

奉公人のはてとおぼしきが宿をかり、四方山の事を語りつくしけり。亭主ほめて、「いかさま只の人とは見え候はず、もはや休み給へ。夜着をまゐらせんや。」といふ。「いやいかほどの野陣・山陣をしても、せう〳〵寒き事をば知らず、無用。」というて、着のまゝいねけるが、夜ふくるにしたがひ、ひた物寒し。「時に亭主。亭主こゝの鼠には足をあらはせたるか。」と問ふ。「いやさやうの事はなし。」と答ふ。「それならば莚を一二枚きせられよ。鼠が着た物を踏まば、きたなからうに。」と。

○

まゐる

一人は寒山、一人は拾得と各、名をいうて出る狂言あり。然るに、二人連立ちたる先のもの、「これは寒山拾得と申すものにて候。」と名のりしかば、次のもの言はんことなかりしに、「我等もその連にて候。」

○

神妙にもなき人集りゐける中に、一人いふ、「そちたちの中に、雷のすしを食うた人があるか。」「いやなし。」「さうあらう。稀なものぢやほどに。」「してそちは食うたか。」「なか〳〵食うた。」「味は甘いか、酸いか。」と問ふに、「ちと雲臭かつた。」

○

何とて芍藥をば歌に詠みたるなきぞと、不審するものあれば、それこそ詠みたる歌あれ。

難*波津に芍藥の花冬ごもり今をはるべと芍藥のはな

難波津に
「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」

○

小僧あり、小夜ふけて長竿をもち、庭をあなたこなたと振りまはる。坊主これを見付け、「それは何事をするぞ。」と問ふ。「空の星がほしさに打落さんとすれども落ちぬ。」と。「さて〳〵鈍なるやつや。それほど智慧が無うてなる物か。そこには竿がとゞくまい。屋根へあがれ。」と。

無うて

○

「人くらひ犬のある處へは何とも行かれぬ。」とかたるに、「さることあり。虎といふ字を手の内に書いて見すれば喰はぬ。」と教ふる。のち犬を見、虎といふ字を書きすまし、手をひろげ見せけるが、何の詮もなくほかと食ひたり。悲しく思ひ、ある僧にかたりければ、「推したり。其の犬は一圓文盲にあつた物よ。」

文盲

○

田舎より主從二人始めて上洛し、京の町に逗留せし。休息の後見物に出る。下人にむかひ、「都はいづれも同樣なる家作なり。よくよく目じるしをせよ。」と教ふる。「心得たり。」と領狀せしが、晩にのぞみ宿を知らず。主腹を立て叱る。返事に、「いや門の柱に唾にて書付をたしかに仕りしが、消えて見え候はず。其の上になほ念を入れ、屋根の上に鳶の二つありしを、目付にしたりしが、それもみないで見えぬ。」と。

領狀

○

ちとたらぬ男のありしが、人にむかひて、「われは日本一の事をたくみだいたは。」といふ。「何事をか。」と問ふ。「されば、よ臼にて米を搗くを見るに、勿論したへさがる杵はやくにたつが、上へあがる杵がいたづらなり。所詮上にも臼をかひさまにつり、米を入れて搗かば、兩方ともに米しろみ、杵のあげさげそつになるまいと思案した

そつ

り。」といひはてぬに、「さてつりあげたる臼に米の入れやうは。」と問へば、「まことにその思案はせなんだよ。」

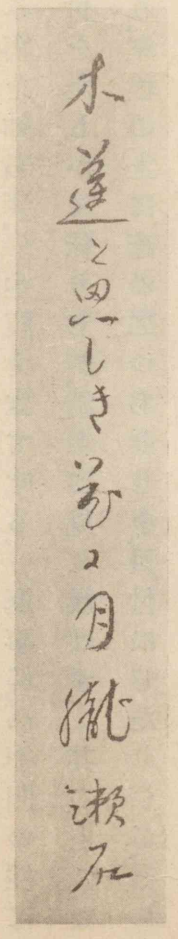
—「醒睡笑」—

二〇　柑子

夏目漱石

木蓮と思しき花に月朧　漱石

据風呂に傘さしかけて春の雨
ぶつ〳〵と大なる田螺の不平かな



夏目漱石筆蹟

菫ほど小さき人にうまれたし
漢方や柑子花咲く門構へ
某は案山子にて候雀どの

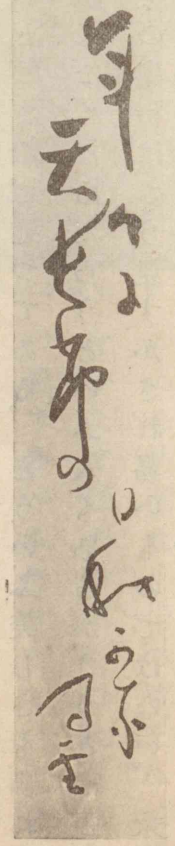
内藤鳴雪
名は素行、愛媛縣の人、俳人、大正十五年歿、年八十。

年々に天長節の日和かな　鳴雪

喪を祕して軍を返すや星月夜
元日や一系の天子不二の山
飾り蝦蟇然として齒朶の中
夕月や納屋も厩も梅の影

—「漱石全集」—

内藤鳴雪



内藤鳴雪筆蹟

波立てて持ちくる鉢や冷奴
朝日奈の蚤とりかぬる鎧かな
押立ててはや散る笹の色紙かな
寫經する傍に湧く柚味噌かな
三人に駕一挺や夕紅葉

大雪の谷間に低き小村かな
塔を塗る朱の滴りや冬木立

—「鳴雪俳句抄」—

二一　田舍の自然

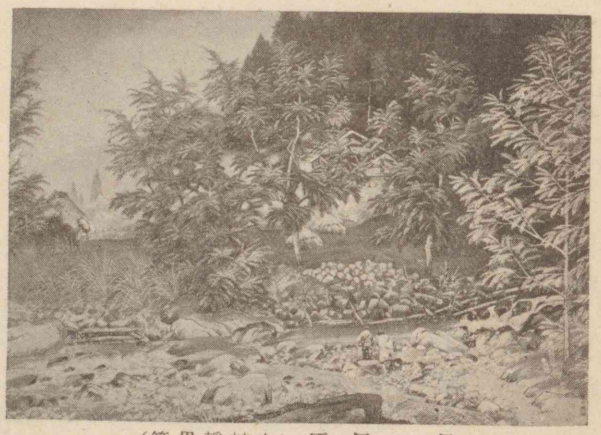
吉村冬彦
本名は寺田寅彦、高知縣の人、理學博士、東京帝國大學教授、明治十一年生。

田舍の自然は確かに美しい。空の色でも、木の葉の色でも、都會で見るのとはまるで違つてゐる。さういふ美しさも、馴れると美しさを感じなくなるだらうといふ人もあるが、さうとは限らない。自然の美の奥行は、さう見すかされ易いものではない。永く見てゐればゐるほど、いくらでも新しい美しさを發見することができるはずのものである。できなければ、それは眼が弱いからであらう。一年、二年で見飽きるやうなものであつたら、自然に關する藝術や科學は、數千年前に完結してしまつてゐるはずである。

六つになる親類の子供が、去年の暮から東京に來てゐる。それはず。

象徵

に「東京とお國とどつちがいゝか。」と聞いて見たら、「お國の方がいゝ。」といつた。「どうしてか。」と聞くと、「お國の川には蝦がゐるから。」と答へた。



里の河原（中村靜思筆）

この子供の蝦といつたのは、必ずしも動物學上の蝦のことではない。蝦のゐる清冽な小川の流、それに翠の影をひたす森や山、河畔に咲亂れる千草の花、さういふやうなもの全體を引きくるめた田舍の自然を象徵する蝦でなければならない。東京で魚屋から川蝦を買つて來て、この子供にやつて見れば、このことは容易に證明されるであらう。私自身もこの蝦のことを考へると、田舍がこひしくなる。しかし、それは現在の田

舍ではなくて、過去の思ひ出の中にある田舍である。蝦は今でもゐるが、「子供の私」はもうそこにはゐないからである。

しかし、この「子供の私」は、今でも「大人の私」の中のどこかに隱れてゐる。そして、意外な時に出て、外界をのぞくことがある。例へば、郊外を歩いてゐて、路端の名もない草の花を見る時や、或は遠くの杉の木の梢の神祕的な色彩を見てゐる時などに、僅かの瞬間だけではあるが、この蝦の幻影を認めることができる。それが消えたあとに殘るものは、淡い「時の悲しみ」である。

自然くらゐ人間に深切なものはない。そしてその深切さは、田舍の人の深切さとは全く種類の違つたものである。都會にはこの自然が缺乏してゐて、その代りに田舍の「人」が入りこんでゐるのである。

—「冬彦集」—

神祕的

貝原益軒
名は篤信、筑前國の人、鴻儒、正德四年歿、年八十五。

二二　四時の樂しみ

貝原益軒

一　花ざかり

花もやう〳〵咲きつゞきて、梅花既にうつろひて後新なるは、わが國ならぬからもゝの花なるべし。桃、紅なるは、たなびく雲の面影のたつ心地す。李、白きは、消えがての雪の、梢に殘れるかと見えて、いとうるはし。

貝原益軒

櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動かしてえならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多きが中にも、第一の見ものなれば、梅散りて後、この頃のこと花は皆けおされぬ。されど、日頃待たせ待たせてやう〳〵咲けるが、

よしさらば云云　續古今集、藤原爲家の歌。

思ふどち

杜　杜甫、字は子美、支那唐代の詩人。（西暦七一二―七七〇）

陳希夷　支那五代の道術家。（西暦？―九八九）

飽くまで見る程もなく疾く散るは、又うらめし。「よしさらば散るまでは見じ山櫻、花のさかりを面影にして。」と古の人の詠みけんも、後の思ひ出にせんとにや、情深し。

春やう〳〵深くなれば、風和かに日暖かに、百草芳を爭ひ、群芳艷を競ふ折なれば、何れの處か春のなからんや。かゝる景色にふれては、人の心も浮きたちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあくがれありき、ひねもす花を眺め暮すこそ、目を恣にし心を快くするわざなれ。世の中の、いみじく嬉しき事のあるが中なる、其の一つなるべし。わが心の樂しみを知らざる人は、無賴の少年の、閑を偷みてそゞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏に香しきも、この折なり。杜が詩に「鶯の歌あたゝかにして、正にしげし。」といひ、陳希夷が「野花啼鳥一般の春。」と詠ぜしも、皆この時なり。花に坐し月に醉ひて、二つながらかねたる樂しみ「春宵一刻

春宵一刻　宋の蘇軾の詩。

惜花　林布逸の詩。あたら夜の「あたら夜の月と花とを同じくば心知れらん人に見せばや」（後撰集、源信明）

夜の間の風　「朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに」（拾遺集、元良親王）

惜しめども　「惜しめどもとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな」（新古今集、素性法師）

値千金、花有清香、月有陰。」といふ詩を思ひ出でられぬ。又「惜花春起早、愛月夜眠遲。」といへり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人のあたら夜の月と花とに背きて空しく臥すは、いと惜しむべし。又夜の間の風のうしろめたきをも知らで、朝起くること遲きは、花を惜しまざるなり。

二　杜鵑

惜しめどもとまらぬ春、已に去りぬれば、いはぬにきたる夏衣のうら珍らしく、今めかしう改れる頃ほひ、大方の空の景色心地よげなるに、青葉の梢若やかに、物毎に春に立ちかはりて、又世異なる有樣なるも、いとなんめでたき。

綠蔭晝寂を生ずれども、わびしからず。閑談に耽る人は繁花にも優れりとす。折待ちえたる杜鵑の初音まづなつかしくて、鶯の啼く音すでに老いたるに代れる心地すなる。もろこし人は杜鵑

空もとゞろに「五月雨の空もとゞろに杜鵑何をうしとて夜たゞ鳴くらん」（古今集、紀貫之）

やはらか

さいつ頃

の聲聞く事を惡めども、我が日の本にては昔よりこれを憐みて、歌にも多く詠めり。夜もすがら空もとゞろに啼きわたれども、聞く人皆あなかまとは思はず。多からぬ所は、今一聲だに聞かまほし。又啼きゆく方の人も待ちなんと思へば、過ぎゆくも更に怨むべからず。卯の花の垣根の雪に紛へるも、ひとり此の月の名を負ひて、美をもはらにすと謂ふべし。凡そ卯月の景色は清くやはらかにして、空晴れ雨久しく降らず、餘寒盡き、日彌永くして暇多ければ、出でて遊ぶにより。

やがて五月になりぬれば、大空の景色さいつ頃に引きかへて、五月雨久しく續き、をり〳〵は鳴神おどろおどろしくて、降らぬ時だに曇らはしく、物のあやめも知らず、園をうかゞふべきひま稀にして、常に垂れこめて日數を經るもわびし。

わらふだ

濁にしまず「蓮葉の濁にしまぬ心もてなにかは露を玉と欺く」（古今集、僧正遍昭）

清少納言

清原元輔の女、一條天皇の皇后に仕ふ。「夏は夜、月の頃は更なり云云」（枕草子）

このねぬる

「このねぬる朝けの風の變るより荻の葉そよぎ秋や來ぬらん」（新後拾遺集、等持院贈左大臣）

三　端居の風

水無月の頃になりぬれば、端居の風したしく、わらふだ敷きて居るも快し。池の心深く、蓮葉の濁にしまずして、花ならで夕風にほひ渡るだにも、こと草にすぐれたり。殊に花の笑の唇開けたるは、所せきまでかをりみちて、世に似たるものなく清らなり。涼を逐ひて木蔭に休らひ、木々の下風のなつかしきに、清き泉を掬び、夏を忘るゝ心地するも、いさぎよし。光明らけき夜半の月を、清き水に宿して見るは更なり、遣水の音など聞くも、いみじう心ゆくばかりなり。日頃經て暑さ堪へ難きに、夕立のしぐれわたりて、名殘涼しきもいと快し。清少納言は「夏は夜」といひつれど、夕は蚊といふ蟲人を螫して、年老いては殊更いみじう堪へ難ければ只このねぬる朝けの風の涼しき景色こそ、清くして心にかなひつれ。

年のは

四　月の色

秋のもなかになりぬれば、一年を經て待ちえたる月あきらけきは、凡そ天地の間にならびなきついでひとつの見ものなれば、よろづの麗しき景色は、皆其の下なるべし。　此のゆふべ此の景にあへるこそ、うき世の中のおもしろさも、あはれさも、殘らぬ折なれ。　年のはに、一とせのうち月ごとに、上の弓張より居待の頃まで、空はれぬれば、夜毎に、心を樂しましめ、目を悅ばしむること、更に數なし。　ことさら、三秋の間、折々のいみじき光を、年ごとに、心にまかせて見ること、まことに幸多き此の世なり。　およそ、天が下の君は、八すみを知ろしめして、天地は皆その領し給へる國の內なれど、いやしきわが輩まで、天つ御空に只一つ懸れる月を、おのがものとして、ほしいまゝに仰ぎ見るも、いともかしこく、身にし餘りて、いみじき幸なり。　やどり分かず、賤しき巷をも同じく照らせる、いとめでたし。

ほい

西行

俗稱佐藤義淸鎌倉初期の歌僧、建久元年歿、年七十三。ひとりぞ月は「寂しさに哀もいとゞまさりけり獨りぞ月は見るべかりける」（千載集）

李白

名は太白、靑蓮と號す、支那唐代の詩人。（西曆七〇一―七六二）

とりわき

年々に、月と花とをあくまで見るは、まことに思ひ出多き此の世なりと謂ふべし。　あたら夜の月なれば、同じくは心知れらん人と共に見ん事ほいなれど、同じ心に見る人稀なれば、西行が、「ひとりぞ月は見るべかりける。」と詠めるも、うべなり。　もろこしの人も、「秋月は俗士と見るべからず。」といへり。　李白は、「今人は古時の月を見ず。」といへれど、昔世々の人のながめこしも、此の月なれば、古人のかたみとなれるも、昔おぼえてしのばし。　古今の人の世を去りゆくは、流水の逝きてかへらざるが如し。　只月の光のみ、いにしへ今、かはる事なきこそ、こよなうめでたくたふとぶべけれ。　月の、梧桐の上にいたり、風の、楊柳の邊にきたるは、心を洗ひ興を催して、えも言はぬ快き折ふしなり。　四時ともに思ひ出多き此の世なれど、とりわき、秋の月は見ざらん後の世の光までも思ひやられ侍る。

五　埋火

少し春ある　「埋火に少し春ある心地して夜深き冬をなぐさむるかな」（風雅集、藤原俊成）

木の葉ふり　「冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峯にさびしき」（新古今集、祝部成茂）

よそほし

雪

冬も來ぬれば、今朝より馴るゝ埋火のもと、やう〳〵立ちはなれ難し。露と霜とおきかはし、紅葉色濃く、木木の梢、淺茅が原も冬枯の景色となり、面がはりするも、秋に異なる眺なり。神無月の時雨も過ぎて、日暖かなれば、少し春ある心地す。うべこの月を小春とぞいへる。されど一の日・二の日漸くかさなれば、風氣愈劇しく、木の葉ふりて山もあらはに見え、殘れる松も峯にさびし。春・夏・秋の艶なる景色、よそほしかりつる有樣、皆此の時に至りて盡きぬ

はだれ雪

れば、殊の外にも變れる空かなと、目驚かれぬ。

日ごろいみじう降りて、いかめしう積りたる曉は、山も里もひたすら銀世界となりて、世かはり景色異なる有樣なり。冬籠せし梢の枯れたるも、再び花咲けるが如し。殊更冬の夜のすめる月に、雪の光りあひたる空こそ、見る人なく獨り身にしみて、哀も深けれ。空晴れて後まで、友待つばかりところどころに消え殘りたるはだれ雪も、いと心にくし。かゝる時、する業なく、たゞ袖ぐゝみしていらゝき居る人は、いとわびしげに見ゆ。或は埋火にむかひ、文も卷きひろぐるを以て業とする人は、樂しみ深くぞありぬべき。凡その事、年に先立ちて早く計るべし。若き時勉めて文を讀み習はば、かゝる時もわびしかるまじ。

—「樂訓」—

二三　仁和寺の法師

兼好法師

一　石清水詣

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、或時思ひたちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺*・高良*などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて、「年ごろ思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へのぼりしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞいひける。すこしの事にも、先達はあらまほしき事なり。

二　足鼎

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとするなごりとて、おの

兼好法師　俗姓卜部、もと京都の吉田神社の祠官、後宇多上皇に仕へしが後出家す、正平五年寂、年六十八。

石清水　官幣大社石清水八幡宮、京都府綴喜郡八幡町にあり。

極樂寺　石清水八幡宮の域内にありし寺。

高良　石清水八幡宮の域内にあり、上高良下高良の二社あり。

おの遊ぶことありけるに、ゑひて興に入るあまり、傍らなる足鼎を取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顏をさし入れて、舞ひいでたるに、滿座興に入る事限りなし。暫しかなでて後、拔かんとするに、おほかた拔かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、頸のまはりかけて、血たり、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、打ちわらんとすれど、たやすくわれず。響きて堪へがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に、帷子をうちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行きけるに、道す

古本徒然草挿畫

ゑひ
かなづ
まはり
くすしのがり

こそ…けめ

がら人のあやしみ見る事限りなし。醫師の許にさし入りて、對ひ居たりけん有樣、さこそことやうなりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きてきこえず。「かゝる事は書にも見えず、傳へたる敎もなし。」といへば、又、仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕がみに寄りゐて、泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝる程に、或者のいふやう、「たとひ耳・鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てて引き給へ。」とて、藁のしべを、まはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳・鼻缺けうげながら拔けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

―「徒然草」―

二四　曾我兄弟

一萬　曾我十郎祐成の幼名。
箱王　曾我五郎時致の幼名。
無慚

一　空ゆく雁

そも〳〵伊豆の國赤澤山の麓にて、工藤左衞門尉祐經に討たれし河津三郎が子二人あり。兄をば一萬といひて、五つになり、弟を箱王といひて、三つにぞなりにける。父におくれて後、いづれも母につき、繼父曾我太郎が許にて育ちけり。やう〳〵成人する程に、父が事を忘れずして歎きけるこそ無慚なれ。人の語れば兄も知り、兄が語れば弟も知り、戀しさのみに明暮れて、積るは月日ばかりなり。心のつくに隨ひて、いよ〳〵忘るゝ隙も無し。我等二十になり、父を討ちけん左衞門尉とやらんを討ちとりて、母の御心を慰め、父の孝養にも奉ぜんと、忙しきは月日なり。數ならぬ身にも日數の積ればにや、憂き事どもに長らへ來て、一萬九つ、箱王七つにぞなりにける。

折節九月十三夜のまことに名ある月ながら、隈なき影に兄弟庭に出でて遊びけるが、五つ連れたる雁がねの西に飛びけるを一萬が見て、「あれ御覽ぜよや、箱王殿。雲居の雁の何處を指して飛行くらん。一つらを離れぬなかの羨ましさよ。」弟聽きて、「何かはさほど羨むべき。我等が伴なふ者どもも、遊べば俱に打連れて、歸れば連れて歸るなり。」兄聽きて、「さにはあらず。いづれも同じ鳥ならば、鴨をも鷺をも連れよかし。空を飛べども、おのれおのれが友ばかりなる事ぞ、とよ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。和殿は弟、われは兄、母はまことの母なれども、曾我殿はまことの父ならず。戀しと

版本曾我物語插畫

思ふその人の行方も敵のわざぞかし。」箱王聽き、「親の敵とやらんの頸の骨は、石・金よりも堅きものか。」と問へば、兄が聽きて、袖にて弟が口を抑へ、「かしがまし。人や聞くらん。聲たかし。隱す事ぞ。」といへば、箱王聽きて、「射殺すとも、首斬るとも、隱して叶ふべき事か。」「さはなきぞとよ。それまでも忍ぶならひぞかし。心にのみ思ひて、上にはものを習へとよ。能は稽古によるなるぞ。我等が父は弓の上手にて、鹿をも鳥をも射給ひけるなるぞ。あはれ、父だにましまさば、馬をも鞍をも用意して給ひなまし。さあらば、犬追物・笠懸をも射習ひなん。我等より幼き者も、世にあれば、馬に乘り物射る、見るも羨まし。」と口說きければ、箱王聽きて、「父だにましまさば、自らが弓の弦食切りたる鼠の首は射させ給ふべきものを。腹立ちや。」といへば、兄が聽きて、「それよりも憎きものこそあれ。」「誰なるらん。自らが乘りつる竹馬うち候ひつる事か。」「その事にてはなき

かしがまし

犬追物　騎馬にて犬を追射する技藝。

笠懸　騎射の一、笠をかけて的とせしを以て名づく、犬追物と共に、鎌倉時代に流行せり。

ぞ。父を討ちける者の憎さに、月日の遲き。」といへば、「習はずとても、弓矢とる身は弓射ぬ事や候べき。」兄が聽きて打笑ひ、「和殿さやうにいふとも、手馴れずしては如何あるべき。射て見よ。」とて、竹の小弓に箟は薄なる笹作ぎの矢さしつがひ、明障子を彼方此方に射通し、何時か我等十五・十三になり、父の敵に行逢ひ、かやうに心のまゝに射通さん。」箱王聽きて、「さる事にては候へども、大事の敵、弓にては如何と覺えたり。かやうに首を斬らん。」とて、障子の紙を切り、高高とさし上げ、側なる木太刀を取りなほし、二つ三つに切つて捨てて立ちたる眼ざし、人に變りてぞ見えたりける。

かくて乳母はこれを忍び見て、恐ろしき人々の企かな。後は如何にと思ひければ、急ぎ母上にぞ語りける。母聽きて大きに驚き、彼等を一間に呼びければ、箱王居なほらざるに、障子の破れたるを叱り給ふべきと心得て、「障子をば存じ候はず、他所の童が破りて候

箟

伊東　伊東祐親。

若君　頼朝と祐親の女との間に生れし子。

あさまし

を、乳母が事々しく申す。」といひければ、母涙を流し、「障子の事にてはなきぞとよ。汝等たしかに聽け。殿原が祖父伊東といひし人は、君の若君を殺し奉るのみならず、謀叛の同意たりしに由つて斬られ奉りし上は、汝等もその孫なればとて、首をも足をももがれ奉るべし。平家の公達をば、腹の中なるをだにも索め失はるゝぞかし。今より後、ゆめ〳〵思ひも寄り、いひもいだすべからず。あさましき事なり。いまだ上にもしろしめされぬか、御宥ありて、知らず顔にて御尋ねもなきと覺ゆるなり。構へて、遊ぶとも門より外へ出づべからず。汝等打連れ遊ぶを、物の隙より忍び見るに、勇み驕る時は、自らが心も共に萎るゝものを。親にも添はぬ孤兒の育つ行方の無慚さよ。後に立ちそひ見るぞとよ。乳母はかくとも知らせぬぞ。近く寄り候へ。」とて、二人が袖を取り、引寄せて、小聲にいふやう、「まことや、さし

も恐ろしき世の中に、惡事思ひ立つとなさやうの事人に聞かれなば、よかるべきか。上樣の御耳に入りなば召捕られ、禁獄・死罪にも行はれなん。恐ろしき箱王よ。」とぞ制しける。一萬は顏打赤め、打傾きて居たり。箱王は打笑ひ「乳母が申しなしと覺えたり。更に後先も知らぬ事なり。」と申しければ、母聽きて、「今より後思ひも寄らざれ。構へて構へて。」といひて立ちぬ。その後は人目を忍びて兄弟は語りけれども、人には更に知らせざりけり。

或日の徒然に、友の童もなく、軒の松風耳に留り、暮れやらぬ日は、一萬門に出でて、人目を忍び、さめ〴〵と泣きけり。箱王も同じく出でけるが、兄が顏をつく〴〵と見て、「何を思ひ給へば、兄御は向うの山を見てさのみ歎かせ給ふぞや。」といふ。兄が聽きて、「さればこそとよ。何とやらん、殊の外に父の俤思ひ出でられて、戀しく覺ゆるぞ。」といひければ、「愚に渡らせ給ふものかな。何程思ひ給ふとも、

父は歸り給ふまじ。いざ歸り給へ。童どものまた參り候はんに、囃物して遊び候はん。」とて、打連れて歸る時もあり。また或夕暮に、夜に近く軒端の雨の物あはれなる折ふし、箱王門に立ちいで涙に咽ぶ時は、一萬弟が袖を控へ、「何を思ひ給へば、四方の梢に眼をかけて、さのみ歎かせ給ふぞや。」「覺えぬ父御とやらんの戀しきは、かやうに心のすごきやらん。兄御は何とかおはする。」とて、さめ〴〵とこそ泣き居たれ。一萬弟が手を取りて、「覺えず知らぬ父を戀しと思はんより、いとしとのみ仰せらるゝ母に、いざや參らん。」とて、袖を引きてぞ入りにける。これも人眼を忍ばんとて、互に諫め諫められて、心ばかりと思へども、さすが幼き心にて、忍ぶよそめの隙々を洩るゝを見聞く人毎に、舌をふり、あはれを催さぬはなかりけり。「良竹は生ひいづれば直なり、栴檀は嫩葉より芳し。」とは、かやうの事に知られたり。されば遂に敵を思ふまゝ討ち、名を萬天の雲に揚

げ、威勢一天に餘れり。あはれにもいみじきにも申し傳へたるは、この人々の事なり。

—「曾我物語」—

二　小袖曾我

四人次第「命牡鹿のかくれ里、〳〵。富士の裾野を狩らうよ。シテ詞「是は曾我の十郎祐成にて候。さても頼朝富士の御狩に御出で候ふあひだ、我等も罷り出で候。また是なる時致は、母にて候ふ者の勘當にて候ふほどに、申し直し連れて御狩に罷り出でばやと存じ候。四人サシ「時しも頃は建久四年、五月半ばの富士の雪、五月雨雲に降りまぜて、鹿の子まだらや村山の、裾野の鹿の星月夜、鎌倉殿の御狩の御遊、げにたぐひなき御事かな。シテ「東八箇國の兵ども、皆御供に參るなれば。四人「定めて敵の祐經も、御供申さぬ事あらじ。たとひ討つまでの、事は夏野の鹿なりとも、ねらひて見ばやと大丈夫の、狩人

鎌倉殿　征夷大將軍源頼朝。

にまぎれ打出づる。下歌「人知れぬ大内山の山守も。上歌「木隠れて、それとは見えじ梓弓、〳〵。矢頃にならば鹿よりも、祐經を射とゞめて、名を富士の嶺に揚げばやと、おもひたちぬる狩衣、たとへば君の御咎、よしそれとても數ならぬ、身にはなか〳〵恐れなし、〳〵。シテ詞「是に暫く御待ち候へ。某まゐりて案内申さうずるにて候。如何に案内申し候。狂言「誰にて御座候ふぞ。や。祐成の御參りにて候。シテ「さん候。某が參りたる由申し候へ。狂言「畏まつて候。大方殿よりの御諚には祐成の御參りならば申せ、時致の御參りならばな申しそと仰せ出されて候。シテ「唯某が參りたると申し候へ。狂言「如何に申し上げ候。祐成の御參りにて候。母詞「此方へと申し候へ。あらめづらしや十郎殿。いづくへの序ぞや。母がために態とはよも。シテ詞「さん候。久しく參らず候ふほどに向顔の爲、又は富士の御狩と申し候ふ程に。母「さればこそ思ひし事よ、君がた

人知れぬ　「人知れぬ大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな」（源頼政）

めづらし

め、御狩に出づる序ぞや。シテ「いつしか親子の御戯れ、珍らし顔に羨ましやと。時致「思ひながらも時致は、不孝の身なれば物の隙より。地「*高間の山の峰の雲、よそにのみ見てや止みなん。同じ子に、同じは、そのもり乳母、〳〵。隔てなくこそ育てしに、さも引きかへて祐成には、いろ〳〵の御もてなし、御祝言の御杯。たとへば時致は、後にうまれしばかりなり。正しく同じ子の身にて、御おぼえ葦垣の、隔てあるこそ悲しけれ。

高間の山の「よそにのみ見てやみなん葛城や高間の山の峰の白雲」（新古今集、讀人しらず）

シテ詞「日本一の御機嫌にて候。あれへ御參りあつて、春日の局をもつて申され候へ。時致詞「某が事は御機嫌いかゞはかりがたく候ふあひだ、先々まゐり候ふまじ。シテ詞「唯某に御まかせあつて、急いで御參り候へ。時致「如何に春日の局、時致の參りたる由それ〳〵申し候へ。いつしか守乳母まで、心變りし春日野の、*飛火の野守、いでてだに見候はぬぞや。詞「時致が參りたる由それ〳〵申し候へ。

春日野「春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜つみてん」（古今集、讀人しらず）

母詞「あら不思議や。祐成は只今來たりぬ。九上（くがみ）の禪師は寺にあり。それならでは子はなきに、時致といふは誰ぞ。や、思ひ出したり、箱根の寺にありし箱王といひしえせ者か。それならば、母が出家になれと申ししを聞かざりしほどに勘當せしに、押してこれまで來たれるは、猶重ねての勘當とや。伊豆・箱根・富士權現も御覽ぜよ。なほ此の後も勘當と。時致「御誓言（おんちかひごと）に部遣戸（しぶやりど）を。地「立て添へられて茫然と、やる方もなき此の身かな。うたてやせめて今一目。御簾・几帳も下りたり。あら情なの御事や。

九上の禪師　兄弟の一人、出家して、越後の九上に住む。

えせ者

寛永本淨瑠璃小袖曾我插畫

シテ「祐成は、かくとも知らで時致が、時移りたり、事よきかと。中門を見やりつゝ、早こなたへと招けば。時致「招かれて山のかせき。地「泣く泣く來たりたり。打たれても親の杖、なつかしければ去りやらず、〳〵。

シテ詞「さて御機嫌は何と御座候ふぞ。時致詞「以ての外の御機嫌にて、猶かさねての御勘當と仰せ出だされて候。

母詞「いかに誰かある。狂言詞「御前に候。母「時致が事を申さば、祐成ともに勘當と申し候へ。狂言「畏まつて候。いかに申し候。時致の御事を御申しあらば、祐成ともに御勘當と仰せ出されて候。シテ詞「まづ畏まつたると申し候へ。某存ずる仔細の候ふあひだ、此たびは同心にて申さうずるにて候ふ。時致詞「いや〳〵某はまゐり候ふまじ。シテ「唯御參り候へ。いかに申し候。我等が親の敵の事、世に隠れなく候ふところに、あまりに便りなく候ふあひだ、時致が事を

郎等

弘法

父河津殿　河津祐泰、一族工藤祐經に害せらる。

申し直し、連れて御狩に出づべき所に、時致が事を申さば、祐成ともに御勘當と候ふや。よく〳〵是を案じ見るに。クリ「總じて祐成を成に郎等もなし。しかも身に思あり。おのれらさへに見捨つるも誠は思ひ給はぬぞや。地「たとひ時致出家の暇を申すとも、兄祐かと、却て御叱り候ひてこそ、慈悲の母とも申すべけれ。シテサシ「それに時致を法師にならぬとの御勘當。たとひ仰せに從ひ、出家仕り候ふとも。地「我等が事は世に隠れなし。あれ見よ、河津が子供にて、敵を遁れんとの出家、正しく弘法のためならずと、同宿も思ひ賤しまば、心も染まぬ墨衣の、浦島が子の箱根寺にて、明暮くやしと思ふならば、なか〳〵俗には劣るべし。

クセ「時致は箱根にありししるしに、法華經一部讀み覺え、常は讀誦し母上の現世安穩、後世善所と祈念する。又は毎日に六萬遍の念佛、父河津殿に廻向する。かほどに他念なき身を、此の三年不孝蒙

る。恩顔を拜せねば、御戀しさも一つ。又は狩場への門出、御暇戀しさ、一方ならぬ望なり。大かた治まる御代なれども、狩場や漁（すなどり）に不慮の爭ひもあるものを。（シテ）「其の上、我等は狩場に於て例惡しし。（地）「昔を思ひ伊豆の奥の、赤澤山のかりくらにて、父も失せさせ給はずや。今とても、狩場とあらばなどしも、御心には懸けざると。恨み顔にも兄弟は、泣く泣く立つて出でければ。（母）「母は聲をあげ、あれ留め給へ人々よ。（地）「不孝をも勘當をも、許すぞ許すぞ時致とて、泣く泣く出でさせ給へば。（兄弟二人）「兄弟は嬉し泣きに、伏しまろべばや。（地）「見る人も思ひやりて、泣き居たりや。

（母詞）「祐成申すによつて、時致が勘當ゆるすにてあるぞ。近う來たりて、狩場への門出いはひて御入り候へ。（シテ詞）「如何に時致、近う參りて、この年月の御物語申し候へ、さるにても。（地）「このほど時致が、盡す心に引きかへて、今はいつしか思子の、母の情有難や。餘りの嬉しさに祐成、御酌に立ちてとり〳〵、時致と共に祝言（しうげん）の。（地）「歌ふ聲。（兄弟二人）「高き名を、雲井にあげて富士の根の。（地）「雪をめぐらす舞のかざし。（二人男舞）

（地）「舞のかざしの其のひまに、〳〵。兄弟目を引き、これや限の親子の契と、思へば涙も盡きせぬ名殘、牡鹿の狩場に遲參やあらんと、暇申して歸る山の、富士野の御狩の折を得て、年來の敵、本望を遂げんと、たがひに思ふ瞋恚の焰。胸のけぶりを富士おろしに、晴らして月を清見が關に、終には其の名を留めなば、兄弟親孝行の、例にならん嬉しさよ。

瞋恚の焰

三　陣屋問答

森鷗外

森鷗外　名は林太郎、醫學博士、文

*將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂・新開二郎忠氏ゐる。

—「觀世流謠曲」—

學博士、帝室博物館總長、大正十一年歿、年六十一。

第一の大名「最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小平太はどういたいたやら。（第二の大名に）固より曾我の殿原は奸盜山賊の類でもござらぬに、笑止にも繩附になり申した。

將軍家源頼朝。

笑止

第二の大名「情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた工藤は父の仇ゆゑ、申し宥める道もござらう。御屋形の御座所近く推參いたいたと申すからは、罪科は所詮逃れますまい。

雜色

（雜色登場）

雜色「只今これへ曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

（雜色退場、五郎登場、大見小平太實政繩を取る、狩野座を進む。）

狩野「曾我の五郎承れ。只今これへ召されたは、某と新開とが承つて、夜討の宿意を尋ねるためぢや。さあ逐一に申し立てい。

五郎（怒る）「默れ、狩野の介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和のため、自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをるが、某とても、遠祖左大臣藤原の武智麿が流れを酌む由緒ある身分ぢや。申す程の事はぢきに申さう。若しそれが愜はぬなら、何事も申すまい。

落魄

楯衝

狩野「怪しかる事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開「それをかれこれ申すのは、犯人の身となつても、まだ君に楯衝く所存か。

頼朝の聲（簾の内より）「いや、待て、狩野・新開。曾我の五郎が申す條尤もなれば、頼朝みづから聽いて遣はす。

（簾を半ば捲く。頼朝登場。舍人二人。近臣二人隨ふ。狩野退く。新開中央に殘る。）

五郎（新開に）「そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそれにゐては、和殿に物言ふに似て快うない。

將軍「新開退いて遣はせ。

新開「はあ。

（新開退く。）

將軍「見れば昨夜の雨に、そこの土は濕つてをる。誰かある。曾我の五郎に敷皮を取らせい。

卒「はあ。

（卒、右手より敷皮を持出で敷く。）

五郎（感激す。）此の敷皮を見るにつけ、十年の昔ぞしのばるゝ、

平相國　平清盛。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺えめでたく、名利のために訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行うた、小ざかしき敵工藤が、時勢の移り變るに乘じて、宇佐美殿によつて御目見えを賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽きたらいで、我々兄

讒舌

弟を殺さうと讒舌を揮うた爲、兄一萬は十二歳、此の箱王は十の時、

由比が濱　相模國にあり。

由比が濱邊に伴はれ、引据ゑられし敷皮は、夢見ごこちに春を待つ、苔を摧く悲涙の座。今は首尾よく父の仇工藤を討つて怨を霽し、此の世に思ひ置くことなければ、最後を急ぐわがために、此の一枚の敷皮は、父に見えん彼岸に、渡す弘誓の舟筏。

弘誓

有難く拜領いたす。（敬く。）

將軍「殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、此の度工藤を討取つたのは、年頃の企か、但しは俄かの思ひ立ちか。

五郎「それは申すまでもない事。我等が父を討たれたは十七年の昔。兄は五歲、某は三歲、しかと意趣をも存ぜなんだが、兄が九つ某が七つになつて、物心を辨へてから以來は、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍「然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび、乃至十度も鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎「いかにも其の往返には心を附け、足柄・箱根・大磯・小磯・由比・小坪のあたりにたゝずみ、兄弟つけ狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少なき時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

意趣

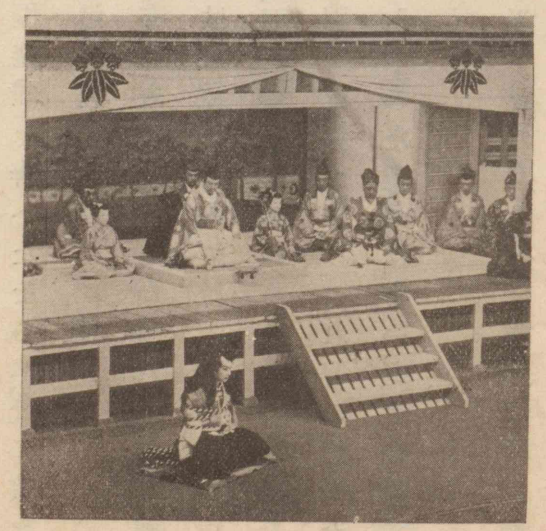
將軍「ふん。さもあらう。扨工藤は父の仇ゆゑ仔細ないが、多くの麾下の侍をば、何故みだりに傷つけた。

五郎「固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、刃向ふものあらん限り、千萬騎をも切靡けうと存じたが、我等の名告る聲を聞いて、足の立所も知らず逃げて行くゆゑ、後日のために一太刀づつ印を附けたまでござる。

將軍「して大藤內はなぜ討つた。

五郎「あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切棄てはいたいたが、所領安堵を喜んで下

麾下



五郎審問の場（劇）

神妙

國する途中、報謝のために引返したは、せめてもの心掛、今はなかなか不便に存ずる。

將軍「神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に踏込んだ。

五郎「これは憚りある申し條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道の主人ではござらぬか。それが成行とは申しながら、三浦殿にあづけられて自滅いたいた。又敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これ等の遺恨なきにあらねば、一太刀おうらみ申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

將軍「おう。好う藏さずに申したぞ。此の度の企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事の序にそれも申せ。

五郎「さやうなものは一人もござらぬ。

將軍「さはいへ、母にはうち明けたであらうな。

五郎「こは仰せとも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死にに往けと申す親のござらうや。

將軍「おう。一族非運に陷つたそちが申し條としては、一々尤も至極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲（上手背後にて）「はあ。四郎忠常只今それへ。

（仁田首桶を持ち、登場。）

仁田「仰せによつて曾我の十郎が首級、これに持參いたいてござる。

將軍「五郎。兄に逢はせて遣はすぞ。それ、いましめ解け。

（大見五郎の繩を解く。）

仁田「實檢の上申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ對面いたされい。

（首桶を開く。）

五郎「懷かしや、兄上。

　點し列ねし松の火の

　消えなば共にと思ひしに、

　不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。　さるにても、兄上。　どうしてお討たれなされたか。　よし仁田殿は猛くとも、時致だに居あはせたら。

仁田「いや。和殿の助太刀までもない。　十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢とに薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、我が薙刀に拂はれて、刀はぽつきと鍔元から。

五郎「なに。　兄上の太刀が折れたとか。　なぜ我が太刀を兄上に佩かせなんだか。

仁田「おう。　その悔み道理至極ぢや。　某とても一門の十郎ゆゑ。

不覺

首討つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼止めて、首を我が手に授けたのぢや。

五郎「さてはよしみある御身が手に、兄上好んでかゝられたか。

（五郎歎く。　犬房丸鞭を持ちて走り出づ。）

犬房「父上の敵、思ひ知れ。

（五郎を鞭うつ。）

五郎「や。　この小童は何者ぢや。

（五郎睨む。　犬房たちろぐ。）

仁田「犬房丸。　御前ぢやぞ。

五郎「なに。　犬房丸が御身か。

　彼も人の子、穉くて、

　親を討たれし悲しみは、

　いかでか我に殊ならん。

果報

果報の繩に引かれずば、
刀を取りて立向ひ、
御身に討たれん我が身なり。

刑場（きやうじよう）の土になるわしぢや。せめてもの心遣りに、さあ、その笞で打つてくれい。

犬房「父上を討つたお前は強い人ぢやと思うたに、優しい事を言うて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎「おう。さうか。さあにつくい小わつぱ、打たれるなら打つて見い。

犬房「なんの打たいで。おのれがおのれが。

（連打す。）

將軍「もう好い好い。犬房それで勘忍いたせ。

犬房「はつ。（鞭を棄てて平伏す。）

閫外

將軍「五郎。此の上問ふべき事もないが、頼朝閫外の職を辱うして、勇士猛卒を惜しむこと、何物にも譬へられぬ。どうぢや。志を翻して奉公いたしてくれまいか。

五郎「それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥（ゆた）められて、行住心に任せるなら、某は犬房に此の素首を取らせ申さう。犬房が討たいでも、

近き恵みに代へられぬ、
遠き恨みのまつはれば、

いつ謀叛人にならうも知れぬ。一しよに死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。首はねられるを待つ外ござらぬ。（大見に）さあ、繩を打たれい。

大見「いや。某は五郎丸が、掛けた儘の御身の繩を、君命によつて預り、又君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つすべ

を知らぬ。

將軍「待て。勇士を失ふは遺恨ながら、其の志は奪ふべからず。五郎が繩は賴朝が手づから打つて遣はさう。

五郎（居直る）「こは思ひも掛けぬ仰せぢや。今生の思ひ出にさあ御繩を拜領いたさう。

將軍（起つ）「わが打つ繩は不動の羂索難伏（なんぐ）のそちには相應はしからう。いで〳〵。

（階を降らんとす。幕）

―「鷗外全集」―

難伏

二五　名文の批評

大町桂月

大町桂月　名は芳衞、高知縣の人、文學者、大正十四年歿、年五十七。

器は入るゝ者をして、己が方圓に從はしめんとし、袋は入るゝ者に隨ひて、己が方圓を必とせず。實なる時は肩に餘り、虛なる時は疊みて懷に隱る。虛實の自在を

知る、布の一袋、壺中の天地を笑ふべし。（袋の贊――横井也有）

横井也有　名は時般、尾州藩重臣、俳人、天明三年歿、年八十二。

方圓。方は四角、圓はまるきなり。壺中の天地。後漢の費長房、汝南の市掾となる。市に老翁あり、藥を賣る。一壺を肆頭に掛く、市罷めば、輙ち壺中に入る。人之を見る者なし。たゞ長房、樓上に於て、之を觀て異とし、因りて往き再拜して酒脯を奉ず。翁乃ち俱に壺中に入るに、たゞ玉堂嚴麗、旨酒甘肴のその中に盈衍するを見るのみ。共に飲み畢りて、出でて曰く、「我は神仙の人なり。過を以て責められたり。今事畢れり、まさに去るべし。子寧ろ能く相隨はんか。」と。後壺公に從ひ、道を求めたり。こゝには、世を壺中にさくるの度量せまきを嘲るなり。

肆頭

酒脯

白眉

寸鐵

也有は德川時代俳文家の白眉なり。この一篇極めて短けれども、意味深長なり。所謂寸鐵人を殺すとは、この類をいへるものか。

老莊　老子及び莊子、支那春秋時代の思想家。

行藏自在

總束

何ぞ…や

「老莊の思想を傳へたるものにて珍らしとにはあらねど、いひあらはし方面白く、且奇拔なり。第一句、器と袋とを對比す。器は客にして、袋は主なり。器は定形ありて、物を律す。之に反して、袋は定形なし。方を容れ、圓を容れ、清濁合せ呑みて、凝滯する所なし。第二句は、袋を更に精しく形容して、虛實を對比す。手にもちきれぬ大いさともなれば、懷に隱るゝばかりの小ささともなる。一虛一實、行藏自在、變化測るべからず。一句・二句、みな雙對なり。第三句、單句を用ゐて句法を變じ、虛實の二字を疊用して總束す。道行はるれば廟堂に立ち、道行はれざれば陋巷に屈す。かくて天地に闊步す。壺中に世をさくる者、何ぞ迂にして陋なるや。結末の一句最も警拔なり。「疊みて。」は、「疊まれて。」といふが、よかるべし。全く之を省きても亦可なり。

太田錦城　加賀國の人、儒者、文政八年歿、年六十一。

善も必ずしも賞せられず、惡も必ずしも罰せられず、天下の事は白日に十字街上を走るやうには無きものなり。さればとて、善人は世にも用ゐられ、人にも敬せらる、人を殺せば首を刎ねられ、物を盜めば鞭うたる、暗夜の如きにもあらず。唯世の中は朦朧たる春月の夜の如きものなり。されども、君子は白晝の十字街頭なりと心得て、世を渡るべし。（世の中――太田錦城）

いつの世にても、社會の制裁はふたしかなるものなり。されど全く制裁なきにも非ず。之を譬ふれば、世の中は白日の十字街頭に非ず、また暗夜にも非ず。朦朧たる春月の夜なり。譬へ得て妙なるかな。紛擾せる世の中、すなほにして氣の弱き者は、厭世家となりて山にかくれ、偏屈なる者は「すね者」となりて世を馬鹿にし、小人は得意になりて僞善家となり、公盜となり、野心を逞しうし、暴利

私曲
榮枯得喪

を貪り、私曲を弄して、天を畏れず。いづれも皆非なり。浮世の榮枯得喪以外に卓立し、人を恨みず、天を咎めず、ひがみ根性を出さず、愚痴をこぼさず、利の外に義を見、現實の上に理想の天地を認め、正道を踏みて、白日十字街頭を闊歩す、これ君子の域なり。達人の域なり。白日に非ずと起し、闇にも非ずと承け、されども白日と思へと結ぶ、筆に力あり。寥々たる短篇の中に、君子達人の面目躍動す。

—「近世名文解剖」—

良寛
俗稱山本文康、越後國の人、歌人、天保二年寂、年七十五。

二六　苔みづ

良寛

あづさ弓春になりなば草の庵をとく訪ひてませ逢ひたきものを

いつ〳〵と待ちにし人は來たり來たり今はあひみて何かおもはん

あきもやゝよさむになりぬわがかどのつづれさせてふむしのこゑする

良寛筆蹟

かすみ立つ長き春日を子供らと手毬つきつゝこの日くらしつ

路のべに菫つみつゝ鉢の子を忘れてぞこしその鉢の子を

秋風に靡く山路のすゝきの穂見つゝ來にけり君がいほりに

山かげの岩間をつたふ苔みづのかすかに我は住みわたるかも

月讀のひかりを待ちて歸りませ山路は栗のいがの多きに

かぜは清し月はさやけしいざともにをどりあかさん老のなごりに
飯乞ふと里にも出でずこのごろは時雨の雨の間なくし降れば
夜もすがら草のいほりにわれ居れば杉の葉しぬぎ霰ふるなり

—「良寛和尚詩歌集」—

二七　蘇州城内

芥川龍之介

芥川龍之介　東京市の人、文學者、昭和二年歿、年三十六。

蘇州　支那江蘇省の首府、もと吳王闔閭の都したる所。

孔子廟へ來たのは日暮方だつた。疲れた驢馬に跨がりながら、敷石の間に草の生えた廟前の路へさしかゝると、寂しい路端の桑畑の上に、薄白い瑞光寺の廢塔が見える。塔の一層一層に、つたかづらや草の茂つたのも見える。その空に點々と飛違ふこの邊に多い鵲も見える。私は實際この瞬間、蒼茫萬古の意とでも形容したい、哀にもうれしい心持になつた。

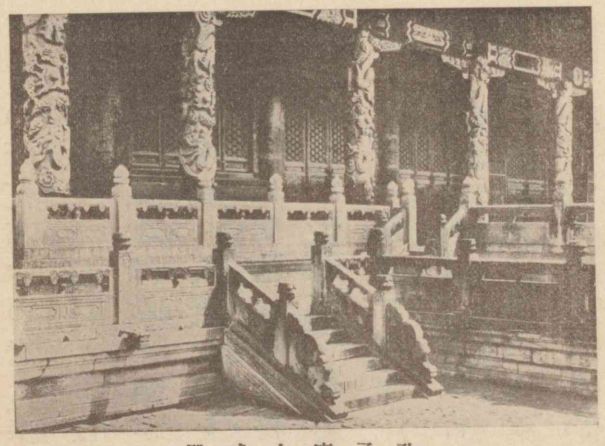
蒼茫萬古

この蒼茫萬古の意は、幸にずつと裏切られなかつた。門外に驢馬を乘捨てた後、路もおぼつかない草の中を行けば、暗い柏（はく）や杉の間に、南京藻の浮んだ池がある。と思ふと、池の緣には赤い筋の帽子の兵卒が一人、蘆や蒲を押分けながら、叉手網で魚をすくつてゐる。こゝは明治七年に再建されたとはいふものの、宋の名臣范仲淹*が創めた江南第一の文廟である。それを思へばこの荒廢は、直ちに支那の荒廢ではないか。しかし、少なくとも遠來の私には、この荒廢があればこそ、懷古の詩興も生ずるのである。私は一體歎けば好いのか、それともまた喜べば好いのか。——さういふ矛盾を感じながら、苦むした石橋を渡つた時、私の口にはいつの間にか、こんな句が微かに謳はれてゐた。「休言（メヨフラニ）竟是人家國。我亦書生好感時。」—但しこの句の作者は私ではない。北京にゐる私の友人である。

范仲淹　蘇州吳縣の人、（西暦九八九—一〇五二）。

矛盾

黑い禮門を通り過ぎてから、石獅の間を少し歩むと、なんとかいふ小さい通用門がある。その門をあけてもらふ爲には、青服の門番の主婦に、二十錢銀貨をやらなければならない。が、その貧しさうな主婦が、痘痕のある十許の女の子と一緒に案内に立つところは、哀である。私たちは彼等の後から、毒だみの花だけほの白い、夕濕りの敷石を踏んで行つた。敷石の盡きる所には、戟門といふのだらう、大きな門が聳えてゐる。名高い天文圖や、支那全圖の石に刻まれたのもこゝにあるが、あたりに漂つた薄明りでは、碑面もはつきりとは見ることができない。たゞその門を



孔子廟大成殿

はいつた所に、太鼓や鐘が竝んでゐる。甚だしいかな禮樂の衰へたるや。――今考へると滑稽だが、私にはこの埃だらけの古風な樂器を眺めた時、なんだかそんな感慨があつた。

戟門の中の石疊にも、勿論茫々と草が伸びてゐる。石疊の兩側には、昔の文官試驗場だつたといふ廊下同樣な屋根續きの前に、何本も太い銀杏がある。私たちは門番の親子と一緒に、その石疊のつきあたりにある大成殿の石段を登つた。大成殿は廟の正殿だから、規模もなか〳〵雄大である。石段の龍、黃色な壁、群青に白く殿名を書いた御筆らしい正面の額――私は殿外を眺めまはした後、薄暗い殿内をのぞいて見た。すると高い天井に、雨でも降るのかと思ふくらゐ、颯々たる音がわたつてゐる。同時に何か異樣な臭が、ぷんと私の鼻を打つた。

「なんです、あれは。」

大成殿　孔子を祭りし殿堂。

ゴヤ Francisco Goya. イスパニヤの畫家、諷刺畫に秀づ。（西暦一七四六―一八二八）

私は早速退却しながら、同行の友をふり返つた。

「蝙蝠ですよ、この天井に巣をくつてゐる。――」

友はにや〳〵笑つてゐた。見ればなるほど敷瓦の上にも、一面に黑い糞が落ちてゐる。あの羽音を聞いた上、この夥しい糞を見れば、いかに澤山な蝙蝠が梁間の暗闇に飛んでゐるか、想ふだに餘り好い氣味はしない。私は懷古の詩境から、ゴヤ*の畫境へ突落された。かうなつては蒼茫どころではない。宛然たる怪談の世界である。

「孔子も蝙蝠には閉口でせう。」

「なに、蝙と福とは同音ですから、支那人は蝙蝠を喜ぶものです。」

驢背の客となつた後、私たちはもう夕もやの下りた暗い小道を通りながら、こんなことを話し合つた。蝙蝠は日本でも江戸時代には、氣味が惡いといふよりも、意氣なものだと思はれたらしい。

ボードレイル Charles Baudelaire. フランスの詩人、惡魔派の創始者にしてまた近代神祕象徵派の祖と稱せらる。（西暦一八二一―一八六一）

山本一清　滋賀縣の人、天文學者、理學博士、京都帝國大學教授、明治二十二年生。

眞摯

しかし、西洋の影響はいつの間にか、鹽酸のやうに地金の江戸を腐らせてしまつた。して見れば今後二十年もすると、「蝙蝠も出て來て濱の夕すゞみ。」の歌には、ボードレイル*の感化があるなどと、述立てる批評家が出るかも知れない。――驢馬はその間も小ばしりに、頸の鈴を鳴らし鳴らし、新綠の匂の漂つた、人氣のない路を急いでゐる。

――「支那游記」――

二八　星の光

山本一清

星の光は、これを仰ぎ見る人の心に眞摯の情を養ひ、又その整然たる運行は、これを知る人のために、嚴肅の思を喚びおこすものであるが、大星小星の神祕的な配列によつて誘はれる星座の親しみは、吾人に眞の美と眞の愛とを味はせる。天は僞無きもの、嚴かなるものであるを知ると共に、星の輝きが誠に愛すべきものである

と感ずる幸福は、星好きの者に與へられた特權である。

星を見ることの樂しみは、洋の東西や邦の如何によらない。又老幼の差や、男女の別によつても違ふものでない。凡そ如何なる人々の間にも、同じ星を愛する心を持つことによつて、喜ばしい友情を結ぶことが出來る。

テニソンの詩の中に、

幾晩も幾晩も、向うの藤のからんだ窓のかなたから、私は休みの床に入る前に、大オリオンが靜かに沈みゆくのを見たことがある。

幾晩も幾晩も、よく澄んだ暗黑から上つてくるプレヤデスが、銀の紐で結ばれた螢の一團のやうにちらついてゐるのを見た。

とあるのは、吾々も詩人と感を同じうするところである。

テニソン Alfred Tennyson. イギリスの詩人。（西暦一八〇九―一八九二）

オリオン Orion. 星座の名。

プレヤデス Pleiades. 星座の名、和名すばる。

更に又、印度の詩聖タゴールが「春の周轉」の中に、

眞夜中に星々が
空に浮ぶは何のため。
こちの世界へ歸つて來い、
街の燈火にしてやらう。

と歌つた心は、小兒の心のみでなく、大人の心をも動かすに十分である。

見る眼を以て見れば、星には心がある。輝きの大小、色調の、青赤など、恰も笑ふが如く、泣くが如く、嚇すが如く、怒るが如く、更に又、媚びるが如く、慕ふが如きものもある。殊にちら〳〵と閃きの速さ緩さを眺めると、或時はそれが跳るかのやうに、又或時は見る者に喃々と話しかけるかのやうである。

純潔と崇高とは、星の光の持つ魂である。見る人の心を、これに

タゴール Rabindranath Tagore. インドの詩人、哲學者、西暦一八六〇年生。

喃々

よつて淨化せずには止まない。こゝに眞の美が生れる。美とは客觀のみではない。又、主觀のみではない。主と客と(心と星と)相結んでこそ、美の精を產むものと言はねばならない。

*エマーソンの言に、「若し星が千年に一夜だけ現れるものならば、こゝに表された神の都の記憶を如何に人々は信じ、あこがれ、又後の世の代々まで傳へることであらう。」とある。毎夜見うるが故に美を感じないとしたならば、そは人の心のゆるみである。文人はこれを「神を瀆すもの」と言ふのであらう。

—「星座の親しみ」—

エマーソン Ralph Waldo Emerson. アメリカ合衆國の詩人、哲學者。(西暦一八〇三—一八八二)

まゐる。

二九　吉野哀史

一　櫻井の訣別

尊氏卿直義朝臣大勢を率ゐて上洛の間、要害の地に於て防ぎ戰はんために、兵庫にひき退きぬる由、義貞朝臣早馬をまゐらせて、內裏に奏聞ありければ、主上大いに御騷ぎあつて、楠木判官正成を召されて、「急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力をあはせて、合戰を致すべし。」と仰せられければ、正成畏まつて申しけるは、「尊氏卿既に筑紫九國の勢を率ゐて、上洛し候なれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候らん。味方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乘つたる大勢に懸けあつて、尋常の如くに合戰を致し候はば、味方決定うち負け候ひぬと覺え候なれば、新田殿をも唯京都へ召され候うて、前の如く山*門へ臨幸なり候べし。正成も河內へ罷り下り候うて、畿內の勢を以て川*尻をさし塞ぎ、兩方より京都を攻めて兵糧をつからし候程ならば、敵は次第に疲れておち下り、味方は日々に隨つて馳せ集り候べし。その時に當つて、新田殿は山門よりおし寄せられ、正成は搦手にて攻めのぼり候はば、朝敵を一戰に滅す事ありぬと覺え候。新田殿も定めてこの料簡候とも、路次にて一軍もせざらんは、無下にいひ

率ゐる。

山門　比叡山。

川尻　淀川の下流を指す。

こそ…候へ

がひなく人の思はんずる所を恥ぢて、兵庫に支へたりと覺え候。合戰はとてもかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。よく〳〵遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候。」と申しければ、「誠に軍旅の事は兵に讓られよ。」と諸卿僉議ありけるに、重ねて、坊門宰相清忠申されけるは、「正成が申す所も、そのいはれありといへども、征伐の爲にさし下されたる節度使*、未だ戰をなさゞる前に、帝都を捨てて、一年のうちに二度まで山門へ臨幸ならんこと、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ所なり。たとひ尊氏筑紫勢を率ゐて上洛すとも、去年*東八箇國を從へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ戰の始より敵軍敗北の時に至るまで、味方小勢なりと雖も、毎度大敵を攻めなびけずといふ事なし。」これ全く、武略の勝れたる所にはあらず、唯聖運の天に叶へる故なり。されば唯戰を帝都の外に決して、敵を鉄鉞の下に滅さん事、何の仔細かあるべきなれば、

節度使　新田義貞を指す。

去年　建武二年。

櫻井の宿　大阪府三島郡山崎町の西南中國街道に沿ふ。

庭訓

唯時をかへず、楠木罷り下るべし。」とぞ仰せ出されける。正成「この上はさのみ異議を申すに及ばず。」とて、五月十六日都を立つて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成これを最後の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて、櫻*井の宿より河内へ返し遣すとて、庭訓を遺しけるは、「獅子子を產んで三日を經る時、數千丈の石壁よりこれを擲ぐ。その子獅子の機分あれば、教へざるに中より跳ねかへりて、死する事なしといへり。況や汝既に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、我が教誡に違ふ事なかれ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見

楠公父子訣別圖（狩野探幽筆）

ん事、これを限りと思ふなり。正成既に討死すと聞きなば、天下は必ず將*軍の世に成りぬと心得べし。然りと雖も、一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死に残つてあらん程は、金剛山の邊にひき籠つて、敵寄せ來らば、命を養*由が矢さきに懸けて、義を紀*信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずる。」と、泣く泣く申し含めて、各〻東西へ別れにけり。昔の百*里奚は、穆*公晉の國を伐ちし時、戰の利なからん事を鑑みて、その將孟*明視に對つて、今を限りの別を悲しみ、今の楠木判官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びんことを愁へて、その子正行を留めて、なき跡までの義を勸む。彼は異國の良弼、此は我が朝の忠臣、時千載を隔つと雖も、前*聖後聖一揆にして、有りがたかりし賢佐なり。

—「太平記」—

將軍　足利尊氏。
養由　養由基、楚莊王の臣、射術の名手。
紀信　漢の高祖の臣、滎陽の戰に高祖の身代りとなりて死す。
百里奚　字は井伯、秦の穆公に仕へし賢相。
穆公　秦の名君。
孟明視　百里奚の子、穆公に仕ふ。
前聖後聖一揆　「得レ志行二子中國一、若レ合二符節一、先聖後聖其ノ揆一也。」（孟子）

吉野の皇居　（池澤青峰筆）

北畠親房
權大納言師重の子、吉野朝の忠臣、正平九年歿、年六十三。

五月
延元元年。

主上
後醍醐天皇。

東宮
後醍醐天皇の第六皇子恒良親王、延元三年薨、御年十五。

二　行宮の秋霧

北畠親房

五月にもなりぬ。尊氏等西國の兇徒を相語らひて、かさねて攻上る。官軍利なくして、都に歸り參るほどに、同二十七日にまた山門に臨幸し給ふ。八月に至るまで度々合戰ありしかど、官軍いと進まず。

十月十日のころにや、主上山門より還幸、いとあさましかりし事どもなれど、なほ行末をおぼしめす道ありしにこそ。東宮は北國に行啓あり。左衞門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣をはじめとして、さるべき兵もあまた仕うまつりけり。

同十二月に忍びて都を出でまし〳〵て、河内の國に正成といひしが一族等を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ふ。もとの如く在位の儀にてぞまし〳〵ける。内侍所もう

奇特

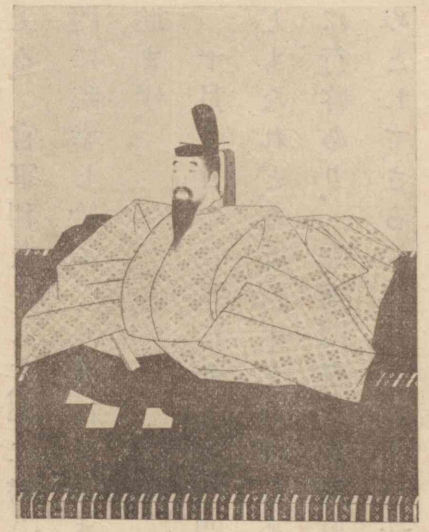
又の年　延元三年。

顯家　北畠親房の長子、延元三年歿、年二十一。

親王　義良親王。

苔の下にも　「もろともに苔の下には朽ちずしてうづもれぬ名を見るぞ悲しき」（金葉集、和泉式部が娘小式部を悼みし歌）

つらせ給ひ、神璽も御身にしたがへ給ひけり。誠に奇特のことにこそ侍りしか。吉野の行幸に先だちて、義兵をおこす輩もありき。臨幸の後には、國々にも御志ある類あまた聞えしかど、次の年も暮れぬ。

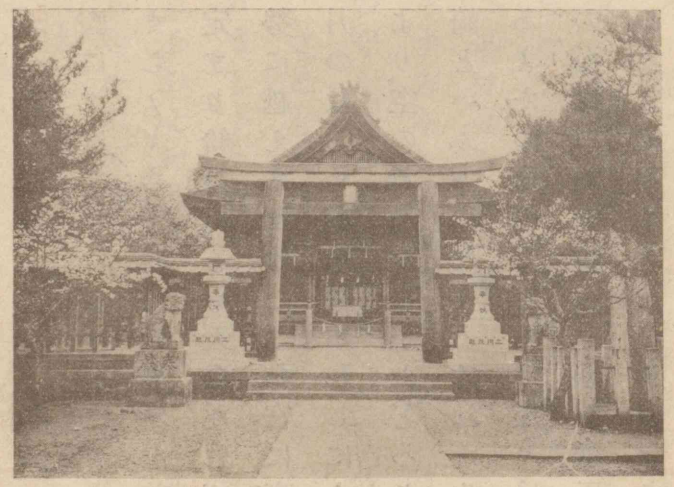


後醍醐天皇御宸影

又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿また親王を先だて申し、重ねてうち上る。海道の國々を悉く平げて、伊勢・伊賀を經て大和に入り、奈良の京になんつきにける。それより所所の合戰あまたたび、互に勝負ありしに、同五月和泉の國石津といふ所にての戰に、時や至らざりけん、忠孝の道こゝにて極りにき。苔の下にもうづもれぬものとては、たゞいたづらに名をのみぞとどめし。心うき世にもありしかな。官軍なほ心をはげまして、男山に陣をとりて、しばらく合戰ありしかど、朝敵忍びて社壇を燒きはらひしより、事成らずしてひき退く。北國にありし義貞も、度々召されしかど、上りあへず。させる事なくして空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。

男山　京都府綴喜郡にあり、頂上に石清水八幡宮鎭座す。

顯信　親房の第二子。



官幣大社吉野神宮

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子また東へむかはしめ給ふべき定めあり。左少將顯信の朝臣中將に轉じ、從三位に敍せられ、陸奥介鎭守將軍を兼ねしめて遣されぬ。東國の官軍悉くか

儲の君

おどろおどろし

れの節度にしたがふべき由仰せらる。親王は儲の君に立たせ給ふべきむね申し聞かせ給ふ。「道のほどもかたじけなかるべし。國にてはあらはさせ給へ。」となん申されし。異母の御兄もあまたまし〳〵き。同母の御兄も、前東宮恆良親王・成良親王ますに、かく定まり給ひぬるも、天命なればかたじけなし。七月の末つかた、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事のよしを啓して、御船のよそひし、九月のはじめ纜を解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地ちかくより、空の景色おどろおどろしく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方にたゞよはれたるに、いとゞ波風おびたゞしくなりて、あまたの船行方しらずなりけるに、皇子の御船はさはりなく伊勢の海につかせ給ふ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。おなじ風のまぎれに東國をさして、常陸の國なる内の海につきたる船ありき。方々にたゞよひし中に、この二つの船同じ風にて東・

めづらか

ぬるがうち

「ぬるがうちに見るをのみをや夢といはんはかなき世をもうつゝとは見ず」（古今集、壬生忠岑）

左大臣

藤原經忠、正平七年歿、年五十一。

西に吹きわけらる。末の世には、めづらかなるためしにぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なきひなの御住居もいかゞと覺えしに、皇大神のとゞめ申させ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせまし〳〵て、御目の前にて天位をつがせ給ひしかば、いとゞ思ひあはせられて、尊くもありしかな。また常陸はもとよりこゝろざす方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵強くなりぬ。奥州・野州の守も、次の年の春重ねて下向して、各〻國につきにき。

さても八月の十日あまり六日にや、秋霧におかされ給ひて、かくれまし〳〵ぬとぞ聞えし。ぬ*るがうちなる夢の世、今にはじめぬならひとは知りながら、かず〳〵目の前なる心ちして、老の涙もかきあへねば、筆の跡さへとゞこほりぬ。かねて時をも悟らしめ給ひけるにや、前の夜より、親王をば左*大臣の第へうつし奉られて、三種の神器を傳へ申されぬ。後の號をば仰せのまゝにて、後醍醐天

皇と申す。天下を治め給ふこと二十一年、五十二歳にておはしまし。

—「神皇正統記」—

三　如意輪寺

安部野の合戰は、霜月二十六日の事なれば、渡邊橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、川より引きあげられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を暖め、藥を與へて疵を療せしむ。かくの如く四五日皆勞りて、馬に乘る者には馬を引き、物具失へる人には物具をきせて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より後心を通ぜん事を思ひ、その恩を報ぜんとする人は、やがて彼の手に屬して、後、四條縄手の合戰に討死をぞしける。

安部野　大阪市の南端、天王寺より住吉神社に至る一帶の地。
霜月　正平二年。
渡邊橋　今の大阪市内天滿・天神兩橋の間にありし橋。
色代

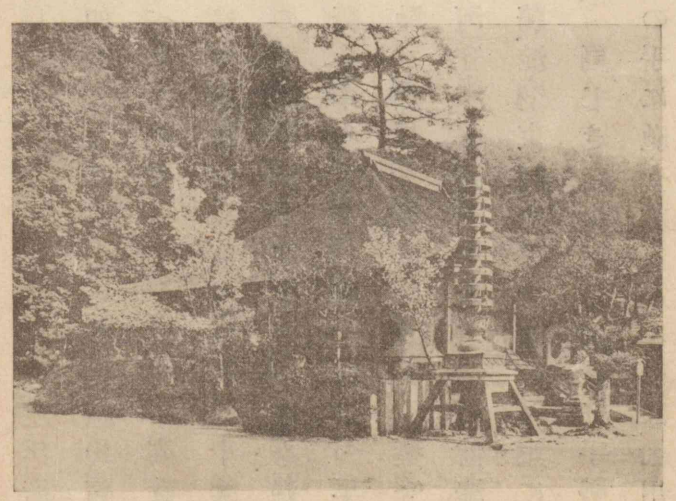
さても今年兩度の合戰に、京勢むげにうち負けて、畿内多く敵のために侵し奪はれ遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍・左兵衛督の周章、たゞ熱湯にて手を洗ふが如し。今はするゝ〳〵の源氏、國々の催し勢なんどを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直・越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。軍勢の手分事定つて、未だ一日も過ぎざるに、越後守師泰は手勢三千餘騎を率ゐて、十二月十四日の早旦にまづ淀に着く。これを聞いて馳せ加る人々には、武田甲斐守・逸見孫六入道・長井丹後入道・厚東駿河守・宇都宮三河入道・赤松信濃守・小早川備後守、都合その勢二萬餘騎、淀・羽束師・赤井・大渡の在家にゐ餘つて、堂舍佛閣に充ち滿ちたり。同じき二十五日武藏守手勢七千餘騎を率ゐて八幡に着く。この手に馳せ加る人々には、細川阿波將監清氏・仁木左京大夫頼章・今川五郎入道・武田伊豆守・高刑部大

左兵衛督　足利直義のこと。
周章

十二月
正平二年。

輔・同播磨守・南部遠江守・同次郎左衛門尉・千葉介・宇都宮遠江入道・佐木佐渡判官入道・同六角判官・同黒田判官・長九郎左衛門尉・松田備前三郎・須々木備中守・宇津木兵三・曾我左衛門・多田院御家人、源氏二十三人、外様の大名四百三十六人、都合その勢六萬餘騎、八幡・山崎・眞木・葛葉・鹿島・神崎・櫻井・水無瀬に充満せり」。

京勢雲霞の如く淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族打連れて十二月二十七日、吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成


如意輪寺

危きを見て
「士ハ見テ危ヲ致シ命ヲ、見テ得ヲ思フ義ヲ。」（論語）

有待の身

危弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を安めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候間、危きを見て命を致す所、かねて思ひ定め候ひけるかによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳にまかりなり候ひしを、合戰の場へは伴はで、河内へ歸し、『死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に卽けまゐらせよ。』と申し置きて死にて候。然るに正行・正時已に壯年に及び候ひぬ。このたび我と手を碎き合戰仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬならひにて、病に犯され、早世仕る事候ひなば、たゞ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰に驅けあはせ、身命を盡し合戰仕つて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行・正時が首を彼等に取られ候か、その二つのうちに

主上　後村上天皇。
兩度の戰　正平二年九月細川顯氏を藤井寺に擊ち、同十一月山名時氏を阿部野に破る。
股肱

戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一たび君の龍顏を拜し奉らん爲に、參內仕つて候。」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に現れければ、傳奏未だ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞぬらされける。

主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顏殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つ事を得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすがへすも神妙なり。大敵今勢をつくしてむかふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戰手を下すべきにはあらずと雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰せいだされければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、たゞこれを最後の參內なりと、思ひ定めて退出す。正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞・同紀六左衞門・子息二人・野田四郎・子息二人・楠木將監・西河子息・關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に各〻名字を過去帳に書きつらねて、その奧に、

逆修

返らじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞとどむる

と一首の歌を書きとゞめ、逆修の爲と覺しくて、各〻鬢髮を切つて佛殿に投げいれ、その日吉野をうちいでて、敵陣へとぞむかひける。

—「太平記」—

四　新葉集の歌

大町桂月

後醍醐天皇の皇子宗良親王、歌に堪能なり。將軍として戰ふ際にも、吟詠を廢し給はず。元弘以來弘和元年までの名歌を撰びて、「新葉和歌集」と題し給ひけるに、長慶天皇はこれを勅撰に準じ給へり。新葉集はかゝる次第にて出來たれば、隨つて吉野山に關するあはれなる歌も少なからざるなり。

堪能

こゝにても雲井の櫻咲きにけりたゞかりそめの宿

と思ふに

これは後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に「雲井の櫻」と稱する櫻あり。雲井は禁中をいふ。さらでだに舊禁中の戀しくて堪へ給はざるに、吉野山中、「雲井」と稱する櫻を御覽じては、豈、叡感無量ならざるを得んや。悲しいかな、かりそめの御宿となりて、延元陵畔長へに游人をして涙襟を沾さしむ。

延元陵　後醍醐天皇の御陵、吉野塔尾に在り。

吉野山花も時得て咲きにけり都のつとに今やかざさん

宗良親王

これ後村上天皇の御製なり。山櫻を土產にして京都に還らせ給ひし時の御嬉しさは、さぞと思はるれど、やがてまた京都を保ち給ふこと能はずして、再び吉野に赴かせ給ひし時の御失望やいかなりけん。

わが宿と賴まずながら吉野山花に馴れぬる春もいくとせ

この歌は長慶天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇孫、後村上天皇

南風競はず
「師曠曰、不レ害アラ、吾驂レバ歌ニ北風ヲ、又歌フニ南風ヲ、南風不レ競ハ、多シ死聲、楚必ズ無カラン功、」（左傳）

嘉喜門院
後村上天皇の女御。

雅懐

の皇子、吉野の山中に人となり給ひけん。父祖の御遺志を嗣ぎ給はんの御志切なれども、南風競はず、終に神器を後小松天皇に授け給へり。されど、知らず、京都は果して御心に叶ひたる御宿なりしか。この天皇の御母を嘉喜門院と申しまつる。その歌に、

櫻花さきて疾く散る習こそわが身の春のものおもひなれ

昨日は紅顔、今日は白頭、人生の老いやすきは男子とても悲歎に堪へざるに、まして女性の御身、櫻花の散りやすき樣を見給ひて、いかに御身をはかなく思し給ひけん。

故郷は戀しくとてもみ吉野の花のさかりをいかが見すてん

これは新葉集の撰者なる宗良親王の歌なり。詩人の雅懐を見る。されど散らばまたいかに都の戀しかるらん。

嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給へり。されど後村上天皇崩御の後は悲哀に堪へず、誓つて琵琶を彈き給はざりき。然るに天授三年七月七日、吉野の宮にて樂を張り給ひけるが、樂終りて後、長慶天皇、門院にむかひて、「一曲を。」と切に乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて、琵琶を彈き給ふ。その時の御製に、

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの秋おもほゆるみねの松風

むかしは父天皇この琵琶を聽きて御心を慰め給ひけん。父天皇今はおはせず。母君の琵琶が亡き父天皇の形見なり。門院のお返しに、

あはれとも君ぞ聽きける今ははや吹きたえぬべきみねの松風

「わが餘命いくばくもなし。君が昔を忍ぶといふ琵琶の音も、やがて聽き給ふに由なかるべし。」となり。二首いづれも意あはれにして、詞も妙なり。宗良親王これを評して、古の勅撰集中の唱和に比して、毫も遜色なしとて、これを新葉集に收め給へり。

—「桂月全集」—

菊池寛　高松市の人、文學者、明治二十二年生。

北の庄　現今の福井市。

樊噲　漢の高祖に仕へたる勇士。

三〇　日本樊噲

菊池寛

越前北*の庄の大廣間に、今銀燭は眩ゆいばかりに、數限りもなく燃えさかつてゐる。その白蠟が解けて流れて、蠟受けの上に堆高く溜つてゐるのを見れば、餘程酒宴の時刻が移つてゐるのであらう。

忠直卿は、祖父の家康から日本樊*噲と媚びられた名が、心を溶かすやうに嬉しくて堪らなかつた。彼は家中の若武士と槍を合せ、

劍を交へ、彼等を散々に打負かすことに依つて、自分の誇を養ふ日日の糧としてゐたのであつた。

今も、忠直卿を上座として、一段下つた廣間に大きい圓形を描いてゐる若武士は、數多い家中の若者の中から選ばれた武藝の達者であつた。まだ前髪のある少年も打交つてゐたが、孰れも筋骨逞しく潑剌たる眸を持つてゐる。が、城主の忠直卿の風貌は、彼等より一段勝れて颯爽たるものであつた。稍肉落ちて瀟洒たる姿ではあるが、その烱々たる眸は殆ど怪しき迄に鋭い力を放つて、精悍の氣が眉宇の間に溢れて見えた。

烱々

忠直卿は、今微醉の廻りかけてゐる眼を開いて、一座をずうつと見まはした。そこに居竝んでゐる百に餘る青年は、皆自分の意志に依つては、水火も辭さない人々であることを思ふと、彼は心の內からこみ上げて來る權力者に特有な誇を感ぜずにはゐなかつた。

が、彼の今宵の誇はそれだけには止まつてゐなかつた。彼は武士としての實力に於ても、こゝに集つてゐる凡ての青年に打勝つといふことが、彼の誇を二重のものにしてしまつた。

彼は今日も亦、家臣を集めて槍術の大試合を催した。それは家中から槍術に秀でた青年を集めて、それを二組に分けた紅白の大仕合であつた。そして、彼自ら紅軍に大將として出場したのである。仕合の形勢は始終紅軍の方が不利であつた。出る者も、出る者も、敵の爲にばた〳〵と倒されて、紅軍の副將が倒された時には、白軍には尙五人の不戰者があつた。其の時に、紅軍の大將たる忠直卿は、自ら三間柄の大身の槍をりゆうりゆうとしごいて勇氣凛然と出場した。洵に山の動くが如き勢であつた。白軍の戰士は見る見る裡に威壓された。最初に出た小姓頭の男はかね〴〵忠直卿の猛勇を怖れてゐるだけに、槍をあはすかあはさぬかに、早く

も持つてゐた槍を捲落されて、脾腹の邊を突かれると、悶絶せんばかりにへたばつてしまつた。續く馬廻りの男と、お納戸役の男も一溜りもなく突伏せられてしまつた。が、白軍の副將の大島左大夫といふ男は、指南番大島左膳の嫡子であつて、槍を取つては家中無雙の名譽を持つてゐた。

「殿のお勢も左大夫にはちとむつかしからう。」といふ囁きが何處ともなく起つた。が、烈しく七八合槍をあはせたかと見ると、左大夫はしたゝかに腰の邊を一突き突かれて、よろめく所をつけ入つた忠直卿の爲に、再び眞正面から胸の急所を突かれてゐた。見物席にゐた家中一統は、思ふ存分に喝采した。忠直卿は、稍息のはずむのを制しながら、靜かに相手の大將の出るのを待つた。心の裡は、何時ものやうに得意の絶頂であつた。

白軍の大將は小野田右近といつた。十二の年から京に於ける

槍術の名人權藤左門の門に入つて、二十の年には、師の左門にさへ突勝つ程の修練を得てゐたが、忠直卿は何物をも怖れない。「えい！」と鋭く聲を掛けられると、猛然として突掛つた。たゞ技術の力といふよりも、そこには六十七萬石の國主の勢さへ加はる如く見えた。二十合にも近い烈しい戰が續いたかと思ふと、右近は右の肩先に忠直卿の烈しい一突きを受けて、一間ばかり退くと、「參りました。」と平伏してしまつた。

見物席の人は北の庄の城の崩るゝばかりに喝采した。忠直卿は得意の絶頂にあつた。上席に歸ると、彼は聲を揚げて、

「皆の者大儀ぢや。いでこれから慰勞の宴を開くと致さうぞ。」と叫んだのであつた。

彼は近頃にない上機嫌であつた。酒宴の進むにつれ、寵臣は代る代る彼の前に進んだ。

「殿！大阪陣で矢石の間を往來せられまして以來は、また一段と御上達遊ばされましたな。我等如きはもはや殿の御相手は仕り兼ねます。」と申し上げた。大阪陣の話さへすれば忠直卿はたわいもなく機嫌がよかつた。

忠直卿は、庭へ下りて見たくなつた。奥殿からの迎ひの者を歸して、小姓を一人連れたまゝ、庭に下り立つた。庭の面には、夜露がしつとりと降りてゐる。微かな月光が、城下の街を澄みわたる夜の大氣の裡に、墨繪の如く浮ばせてゐた。

忠直卿は久し振りに、かうした靜寂の境に身を置くことを欣んだ。天地は寂然として靜かである。たゞ彼が見捨てて來た城中の大廣間からは、雜然たる饗宴の叫びが洩れて來る。それも彼が座を立つてからは、一段と酒席が擾れたと見え、吾妻拳を打つ掛聲迄が交つて聞える。それも餘程の間隔があるので、さううるさく

四阿

は耳に響いて來ない。

忠直卿は萩の中の小徑を傳ひ、泉水の緣を廻つて、小高い丘にある四阿へとはひつた。そこからは、信越の山々が微かな月の光を含んでゐる空氣の中に、朧に浮いて見える。忠直卿は今迄の大名生活に於て、未だ經驗した事のないやうな感傷的な心持に囚はれて、思はずそこに小半時を過した。

すると、ふと人聲が聞える。今迄寂然として、蟲の聲のみが淋しかつた處に、人聲が聞え出した。聲の樣子で見ると、二人の人間が話しながら、四阿の方へ近寄つて來るらしい。忠直卿は今自分が享受してゐる靜寂な心持が、不意の侵入者に依つて搔亂されるのが厭であつた。併し、小姓をして近寄つて來る人間を追はしむる程、今宵の彼の心は荒んではゐなかつた。二人は話しながら、段々近づいて來る。四阿の裡へは月の光が射さぬので、そこに彼等の

主君がゐようとは、夢にも氣附いてゐないらしい。

忠直卿は、その二人が誰であるか見極めようとは思つてゐなかつた。が、二人の聲が段々近づいて來ると、それが誰と誰とであるかが自然と判つて來た。稍潰れたやうな聲の方は、今日の大仕合に白軍の大將を勤めた小野田右近である。甲高い上ずつた聲の方は、今日忠直卿に一氣に突伏せられた白軍の副將大島左大夫である。二人は先刻から何でも今日の紅白試合に就いて話してゐるらしい。

忠直卿は、大名として生れて初めて、立聞きをするといふ不思議な興味を覺えて、思はず注意をその方へ集注させた。二人は四阿からは三間と離れない泉水の汀で立止つてゐるらしい。左大夫は心持聲を潛めたらしく、

「時に殿の御腕前はどう思ふ。」

けはひ

ときいた。右近が苦笑したらしいけはひがした。

公方

「殿のお噂か、聞えたら切腹物ぢやなう。」

「蔭では公方のお噂もする。どうぢや、殿の御腕前は。眞實の御力量は。」

と、左大夫は可なり眞劍にきいて、ぢつと息を凝して、右近の評價を待つてゐるやうであつた。

「さればぢやなう。いかい御上達ぢや。」

といつたまゝ右近は言葉を切つた。忠直卿は初めて臣下の僞らざる賞讃を聞いたやうに覺えた。が、右近はもつと言葉をつゞけた。

會心

「以前ほど勝をお讓り致すのに、骨が折れなかつたわ。」

二人の若武士はそこで顏を見合せて、會心の苦笑をしたらしいけはひがした。

衝動

中核

右近の言葉を聞いた忠直卿の心の中に、そこに突如として感情の大渦卷が聲を立てて流れ始めたのは無論である。忠直卿は生れて初めて、土足で頭上から蹂み躪られたやうな心持がした。彼の唇はぶる〳〵と顫へ、惣身の血潮は煮えくり返つて、ぐん〳〵頭へ逆上するやうに思つた。右近の一言に依つて、彼は今迄自分が立つて居つた人間として最高の脚臺から引きずり下ろされて、地上へ投げだされたやうな、名狀し難い衝動を受けた。

それは確かに激怒に近い感情であつた。併し、心の中の有り餘つた力が、外にはみ出したやうな激怒とは全く違つたものであつた。その激怒は外面は旺んに燃え狂つてゐるものの、中核の處には癒し難い淋しさの空虛が、忽然と作られてゐる激怒であつた。彼は世の中が急に賴りなくなつたやうな、今迄の生活、自分の持つてゐた誇が、悉く僞の土臺の上に立つてゐた事に氣が附いたやう

な淋しさに、ひし〳〵と襲はれてゐた。

彼は小姓の持つてゐる佩刀を取つて、即座に兩人を切つて捨てようかと息込んだが、さうした烈しい意志を遂げる強い力は、此の時の彼の心の裡には少しも殘つてはゐなかつた。其の上、主君として臣下から僞りの勝利を媚びられて得意になつてゐた自分が淺ましいと同時に、今兩人を手刃して、その淺ましい事實を自分が知つてゐるといふ事を、家中の者に知らせるのも彼にとつては可なりの苦痛であつた。忠直卿は、胸の内に湧返る感情をぢつと抑へて、如何なる行動に出づるのが、一番適當であるかを考へた。餘りに不用意にかうした經驗に出會した爲、たゞさへ昂奮し易い忠直卿の感情は、收拾の附かぬほど混亂した。

忠直卿の傍に、先刻から置物のやうにぢつとして、蹲まつてゐた聰明な小姓は、さすがに此の危機を十分に知つてゐた。二人の男

收拾

に、こゝに彼等の主君がゐることを教へねば、どんな大事が起るかも知れぬと思つた。彼は主君の凄じい顏色を窺ひながら、二三度小さい咳をした。小姓の小さい咳は、此の場合甚だ有效であつた。右近と左大夫とは附近に人がゐるのを知ると、はつとしてその冒瀆な口を緘んだ。二人は言ひあはしたやうに、足早く大廣間の方へ去つてしまつた。

冒瀆

忠直卿の眸は怒に燃えてゐた。が、その頰は凄じい迄に蒼ざめてゐる。彼の少年時代からの感情生活は、右近の一言に依つて、物の見事に破產してしまつてゐた。彼が幼にして、遊戲をすれば近習の誰よりも巧であつた事や、破魔弓*の的を競へば、近習の何人よりも多く命中矢を出した事や、習字の稽古に筆をとれば、祐筆の老人が膝頭を叩いて彼の手蹟を賞讚した事などが、皆不快な記憶として彼の頭に一時に蘇つて來た。武術の方面に於てもさうであ

破魔弓　江戸時代歲首に兒童の弄びし弓、後には二張立の飾弓に矢を添へたるをいへり。

優越

つた。劍をとつても、槍をとつても、忽ち相手をする若武士に打勝つ程の腕に瞬く間に上達した。彼は今迄自分を信じて來た。自分の實力を飽く迄信じて來た。今右近等の冒瀆な蔭口を耳にしても、それが彼等の負惜みであるとさへ、ともすれば思ふ程である。

併し、今日の右近の言葉は、その言葉が發せられた時と場合とを考へれば、決して冗談でもなければ嘘でもなかつた。自信に充ち滿ちてゐた忠直卿の耳にも、正眞の事實として聞えぬわけには行かなかつた。右近の言葉は彼の耳朶の裡に彫りつけられたやうに殘つてゐる。

考へて見ると、忠直卿は今日の華々しい勝利の中でも、何處までが本當で、何處からが嘘だか判らなくなつた。否今日のみでない、生れて以來幾度も試みた遊戯や仕合で、自分が占めた數限りのない勝利や、優越の中で、どれだけが本當の物で、どれだけが嘘のもの

焦躁

旺然

だか判らなくなつた。さう考へると、彼は心の中を搔きむしられるやうな、烈しい焦躁を感じた。彼とても、臣下の凡てから僞の勝利を奪つてゐるのではない。否その中の多くの者には、正當に勝つてゐるのだ。それだのに、右近や左大夫などの不埒者のゐる爲に、自分の勝利が凡て不純な色彩を帶びるに至つたのだと思ふと、彼は今右近と左大夫とに對し、旺然たる憎惡を感じ始めたのである。

が、それればかりではなかつた。かうなると、つい三月ばかり前に大阪の戰場で立てた偉勳さへ、何だか怪しげな正體の判らぬもののやうに、忠直卿の心の中に思はれた。彼が今迄誇としてゐた日本樊噲といふ稱號さへ、何だか人を馬鹿にしたやうな、誇張を伴うてゐるやうにさへ思はれ出した。家臣どもから、いゝ加減に扱はれてゐた自分は、お祖父樣からも手輕に操られてゐるのではない

かと思ふと、忠直卿の眸には、初めて不覺の涙が滲み始めた。

—「忠直卿行狀記」—

新編國文讀本　新制版　卷五終

新編國文讀本新制版

昭和六年七月二十日印刷
昭和六年七月二十二日發行
昭和六年十月二十八日訂正印刷
昭和六年十月二十九日訂正發行

新編國文讀本新制版
定價　自卷一　至卷十　各金六拾錢

編者　千田憲　東京市本郷區千駄木町貳百七拾九番地
發行者　塚田六彌　東京市本所區廐橋一丁目廿七番地ノ二
印刷者　守岡功　東京市本所區廐橋一丁目廿七番地ノ二
印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場

著作權所有

發行所　東京市本郷區千駄木町貳百七拾九番地　右文書院　電話小石川三七二三番　振替東京七四五二八番

大賣捌　東京　林平書店・大阪　柳原書店・名古屋　教生社

1 [illegible]

2 主[illegible]歷[illegible]

3 高拔

4.

5 [illegible]

6

7、[illegible]

8、

9、[illegible]

10.

三年二祖大公業風